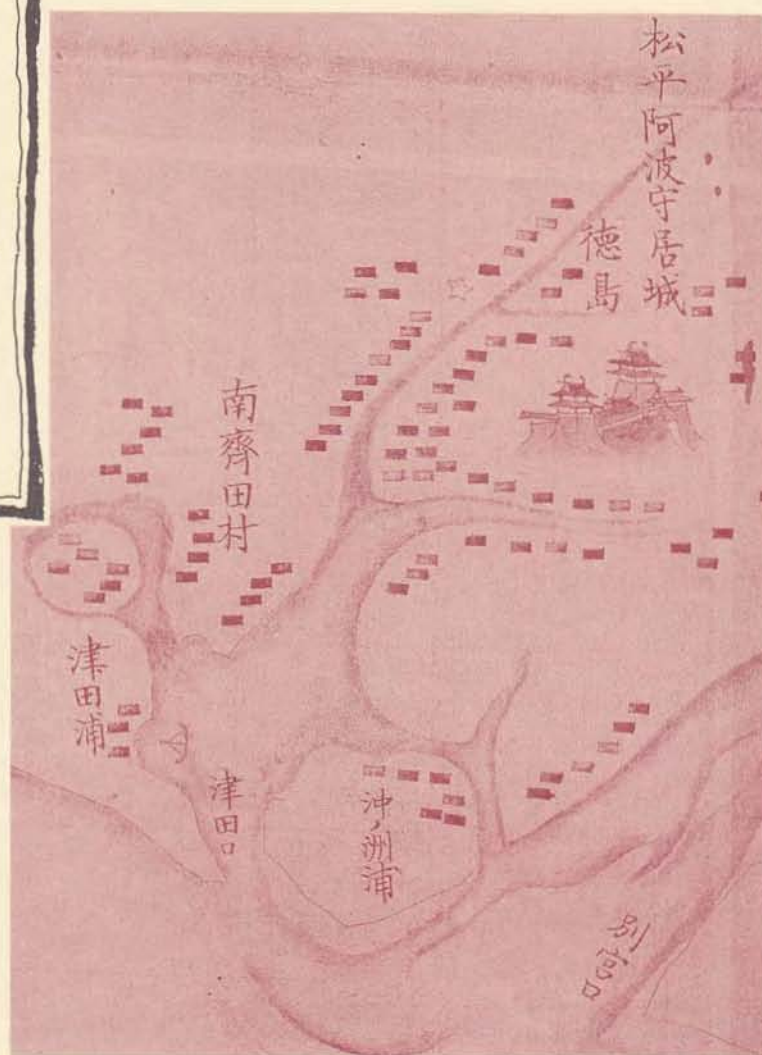


史料と伊能図

伊能忠敬

研究



二〇〇二年 第三十号

伊能忠敬研究会

表紙図解説

米国議会図書館蔵 伊能大図部分「徳島」付近

昨年七月にアメリカ伊能大図調査報告の記者発表した際に、実物がないので、写真だけ数枚お配りしたが、実は何十枚か、各地の都市を中心に写真を撮っていた。

共同通信社からは非にと頼まれて、地方紙向けにまずまずの写真だけ配信したところ、いっせいに自社の地域分を大きくカラー掲載されたのには驚いた。

目下、これらを坂本幹事担当のホームページで公開の準備中だが、会報でも逐次紹介することとしたい。

本図は徳島城周辺の部分で、右下の大河は吉野川である。河川、沿海は淡い水色で着色している。河口には大きな州がいくつもあつたことが分る。測量線は砂州の先端の砂浜（原図では黄色く染めてある）を通っている。徳島城下には星印☆がある。宿泊し天測を行っているが、測量線は伸びていない。

徳島城は絵画的に描くが、市街、集落を意味する民家の屋根は四角な黒印で済ましている。実用的な写しであるため、絵画的な部分は極力簡素化された。そのなかで、せめてお城だけは原画の趣を忠実に伝えようとしたのであろう。大図副本の描画にかなり近い。

津田浦に港の表示である朱の船印が書いてある。徳島藩の測量家岡崎三蔵は、藩命でここから縄引きの鉄砲足軽に紛れ込んで、伊能測量を観察した。忠敬に問いただされて、白状したところ、そんなことなら教えてやると、丁寧に教授を受けたことを自家の記録に残している。

（題字は伊能忠敬の筆跡）

（渡辺）

目次

最近の話題

成田山仏教図書館創立百周年を祝す

徳山市でミニ歩測大会

北九州市測量記念碑に都市基準点設置

都市基準点の完成まで

丹後丹波地方の足跡紹介 朝日新聞から

芳名録より

研究ノート

伊能小図（旧海兵）の調査レポート

『伊能家文書紹介21』忠敬と間宮林蔵（二）

加賀藩天文暦学者 西村太冲（三）

伊能忠敬は長寿だったか

多良街道―その追分をめぐって

伊能忠敬が測量した丹波・丹後の道

伊能忠敬と橋津

地域史料紹介

岩城島の文書

伊能忠敬の江戸在住日記（九）

新伊能忠敬物語「余話」

伊能測量隊の旅と旗本巡検使の通行

忠敬談話室だより

「伊能忠敬記念館」の看板が新しく

渡辺 一郎

九

石川 清一

村井 純孝

伊能 陽子

谷村聖二郎

安藤由紀子

河崎 倫代

石川 清一

松尾 紀成

小林 清

田中 精夫

伊藤 栄子

佐久間達夫

渡辺 一郎

六四

五八

四四

五一

五八

六四

（入会案内・編集後記）

成田山仏教図書館創立百周年を祝す

渡辺 一郎

成田山仏教図書館の館報六六号をいただいて同館が創立百周年になることを知った。開いてみると、二十数年前に初めてお伺いしたときの総務課長綿貫さんの感想文があった。当時は成田図書館といっていたが、お逢いしたのは伊能図探しを始めたごく初期の頃だった。予約もなく訪れた私から、伊能図を調べている、という話を聞いて、大部な伊能中図八枚をテーブルの上に出していただいた。秋岡武次郎氏の伊能図の所在を記した論文に「成田図書館にも中図があるという」とただ一行書いてあるだけで、実見はしていないらしいし、大谷氏はじめ他の資料でも名前が出てこない伊能中図だった。

それまでに、東京国立博物館の伊能中図をみずから箱から出して熟覧し、よく承知していたから、成田中図を見て驚いた。秋岡氏は軽視しているが、内容的には同等またはそれ以上だった。この驚きを綿貫氏に伝えておいたところ、後に館報の冒頭に執筆を依頼された。たばこ代にと、執筆料一万円を送っていただいたが、私がこれまで働いてきた通信・コンピューターの仕事以外で原稿料をいただいた第一号である。

以来、成田中図の存在を、機会をとらえてPRしてきたが、門外不出といわれた同図を、江戸東京博物館の伊能忠敬展には東京国立博物館の伊能中図と交代で出展していただいたし、伊能ウオークでは、日本土地家屋調査士会で複製を作らせていただき、持ち回ることがで

きた。そのほかにも、各所から多数の展示希望があると聞いている。この間、現総務課長の桜井さんには散々お世話になった。創立百年を機会にあらためて心から感謝の意を表したい。

成田山仏教図書館は成田山新勝寺で運営する私立図書館で、館長は成田山新勝寺の貫主が兼ねておられる。明治三五年の創立以来、成田



成田山仏教図書館

図書館と称してきたが、昭和五九（一九八四）年に成田に市立図書館ができたので、成田市立図書館と紛らわしいのを避けたのか、成田山仏教図書館と改称された。

名前は仏教図書館であるが、蔵書は仏教関係ばかりではなく、百年の長期にわたる真剣な経営により三〇万冊に上る希書・良書を所蔵する。全国的に私立図書館は数少ないのであるが、西の天理図書館と並んで、東西の双璧であり、創立以来一貫して無償で一般に開放されている。

蔵書のなかには、伊能忠敬の測量日記（写本）がある。これは同館で戦前に、わざわざ筆写されたものという。伊能忠敬記念館の測量日記には、一般の人はさわるできないが、同館の日記はお願いすれば閲覧できるだろう。成田山仏教図書館はそういう図書館である。

我々に最も関係の深い成田山の伊能中図は国内の中図のなかでは、完成度が一番高いのであるが、伝来はわかっていない。紀元二六〇〇年記念として戦前の昭和一五（一九四〇）年に、成田市中の古書店・宇宙堂から購入されたことまでは判っているが、その他の記録は残っていない。桜井総務課長にお願いして調べていただいたが、成田山から購入費が出ていることは確かであるが、当時の新勝寺の関係者で存命者はなく、聞き取りも出来なかつたという。ただ、桜井氏によると、成田中図の購入と前後一年くらいに、佐倉城下の図と、住吉物語（重文）を購入しており、おそらく佐倉の堀田家から出たものであるうとのことである。

たしかに、伊能中図の完全揃いは、昔でも大名道具であつて、普通の人が持つものではない。また、佐倉城下の図なども堀田家を強く連想させる。幕末の藩主・堀田正睦は、藩政改革、社倉の設置、蘭学の奨励、兵法の研究にと時代の流れに沿って藩を経営しているし、幕府

に出仕しては老中首座を勤め、対米交渉の任にあつたなど、伊能図に関心を持ち、写本を作らせる動機は充分にあつた。

それにもう一つ、旧大名家から所蔵物が流出するのは、敗戦後の混乱期に経済的理由によるものが多かったが、堀田家では戦前に一部の財産整理が行われている。時期が一致するのである。人知れず処分されたものかも知れない。体面があるので、一切の記録なしで、今後、永く保存されることも考慮に入れて、成田山に譲られたものかとも思われる。

価格も高いものではなかつたらしい。成田山側としても、評価はできなかつた筈であるから、堀田家伝来の宝物ということをし、唯一の根拠として引き受けられたのであろう。

いづれにしても、成田山当局の戦前の高配で、成田中図がこれまで保存され、公開されており、今後にも守り伝えられてゆくことは、社会的にも大変意義深いことであらうと思う。

ついでながら、西の天理図書館にも伊能中図が保存されていることを、御存じの方は少ないかも知れないが、全一〇枚の最終本伊能中図が所蔵されている。筆者は、一部しか実見していないが、完成度としては成田中図に比し、差があるように感じている。東西の私立図書館の雄に、それぞれ伊能中図が所蔵されているのは奇しき因縁である。

いっぽう、対照的な話で恐縮であるが、戦後、岡山の池田家が財産整理をしたとき、売り立てられた財物のなかに伊能中図があつたことを、当時の国宝調査員・是沢恭三氏が実見し、記録に残しているが、落ち着き先はいまだに不明である。誰か好事家に落札され、収集品のなかに埋没しているのではないかと考えると、まことに残念である。

平成六年九月

伊能小図（旧海兵）の調査レポート

谷村 聖二郎

一、はじめに

伊能忠敬が日本全国を実測して作成した「日本地図」は伊能図といわれている。約二百年近く前に作られた伊能図の素晴らしさは、文久年間に日本沿岸の測量のため来日した英国軍艦が、伊能小図を幕府から貰って測量せずに帰った話でも有名であるが、その精度は緯度一度の長さが今日の計測値に比べ、千分の一の誤差しかないほど正確なものであった。

伊能図は、忠敬五才から七才までの十二年間に、殆ど地球を一周する距離を歩いて作られたもので、彼の努力に敬服し、図の美しさに感服する。

渡辺一郎氏はこれまでの文献を参考にしながら、現時点における伊能図の所在と現況について調査を行い研究ノートを刊行したが、この中に、記録で存在が確認されながら所在がわからない伊能図として十三件を挙げている。このうちの伊能小図（旧海軍兵学校蔵）を求めて、筆者谷村が江田島、宮島及び大三島を追跡調査したレポートである。

二、伊能図

数次にわたり幕府に上呈された伊能図の種類とその数は膨大なも

発見できなかった旧海軍兵学校蔵

「伊能小図」副本

平成一四（二〇〇二）年八月九日、全国各新聞紙いっせいに、東京国立博物館で昌平坂学問所旧蔵「最終本伊能小図」が発見されたことを報じた。自館の所蔵品を発見とはおかしな話ではあるが、「日本全図」という名称で保管されており、これまで伊能図とはまったく気付かなかったという。たまたま九州国立博物館開設からんで整理中に、然るべき方の眼にとまった。伊能忠敬が注目されている時節柄、大きな発見なので発表することになったようである。

発表に先立ち、本会の渡辺代表は確認のため調査を依頼されているが、品物は傷んでいたが、間違いなく伊能小図最終本の本物であったという。経緯はともあれ、現存する副本、写本、複製図などすべての伊能図を通じて、伊能隊が制作したことが明らかで、かつ幕府機関に提出した図は一枚もない。本図は装丁からみて上呈本でないことは明白であるが、幕府機関への提供という意味で、限りなく正本に近いといえるものである。大発見なので、シツカリ広報すべきであると、いろいろ協力されて大ニュースとなった。

小図三枚揃いは日本では始めてであるし、小図で針穴のある図は世界で初めてである。しかし、そういうことよりも、唯一の伊能隊制作による幕府機関への提出本という点に注目すべきであると渡辺氏はいう。

ところで、本会でも平成六年に、渡辺代表の学友で会員の、元海上保安大学校教授（通信機器）谷村聖二郎氏が旧海軍兵学校に寄付されたと記録に残っている足立信頭（左内）旧蔵の伊能小図副本の行方を徹底的に探索されている。結果的に発見できなかったが、会報発行以前のことでもあったので、記録に残すため再録する。体裁を整えるため編集部で若干加筆したことをお断りしたい。

（編集部）

のであるが、その殆どは大谷亮吉著「伊能忠敬」(岩波書店、大正六年)で知ることが出来る。これを出発点として、秋岡武次郎の論文「伊能忠敬作成の日本諸地図の現存するもの若干」(地学雑誌、昭和四二年)で察してみる。

今回の対象は、文政四年(1821)に最終上呈された「大日本沿海輿地全図」のうちの伊能小図である。縮尺は1/432000、曲尺三分を一里としている。日本全体を三枚で構成しているので、一枚の図幅は五尺二寸九分という相当に大きなものである。

ところで、文政四年の伊能図は、大図214枚、中図8枚、小図3枚からなっていたが、幕府から明治政府に引き継がれた後、明治六年(1873)の皇居炎上の際焼失した。その後伊能家にあった副本が政府に献納されたが、これも大正十二年(1923)の関東大震災で灰となったので、正式な伊能図はすべて失われた。

しかし、上呈から最後の焼失まで約百年の間に、必要に応じて副本や写本(副本からの複写)が作られており、これらも伊能図に含めて調査の対象とした。副本や写本は江戸期に針穴を用いて複製されたもの、あるいは手書で忠実に書き写された地図をいい、刊行された地図は含まないこととした。

次に、文献により小図三枚を追跡すると、

(1)大谷著書(大正六年時点)では、

副本は ①東京帝国大学に1部

(明治七年伊能家より政府に献納したもの)

②静岡県浜松町内田令太郎の所蔵1部

(足立信頭の後裔の許に伝わったものを近年購入)

写本は ①英国海軍省に1部

(文久年間幕府が英国測量艦長に与えたもの)

②大槻如電の所蔵1部

(阿部伊勢守が命じて謄写させたもの)

③維新の前後に航海上大いに実用に供せられ、諸藩具眼の士が競ってこれを謄写したものの多数

なお、慶応明治の頃、開成所において本図をもとに増補して木版の官版実測日本全図四舗が刊行されている。

(2)秋岡論文(昭和四二年時点)によると、

副本 ①関東大震災のため焼失

②内田氏の子息六郎氏により、第二次世界戦争以前に江田島の海軍兵学校に寄贈された。昭和三十年代に古地図研究家・南波松太郎氏が海上自衛隊第一術科学校で調べてもらったが、見当たらなかった。

写本

①英国海軍省にある。

②大槻氏の孫茂雄氏が、終戦直前に東京静嘉堂文庫に蔵書を譲られたが、小図がその中に含まれていたかは不明である。

以上の他、南波松太郎氏が昭和三十一年に東京大屋書房より購入された小図二枚の記載がある。これは後に神戸市立博物館に寄贈されるが、本州中部を欠いている。

(3)渡辺研究ノート(平成五年時点)では、

副本 ②国書総目録(岩波書店・補訂版第1刷1989年9月)

に「伊能忠敬実測調製日本全図(旧海兵蔵)三葉」とある。戦後の資料ながら伊能図の記載があり、これと小図

写本

との関係を確認する必要がある。

①英国海軍省ではなく、英国グリニッチ国立海事博物館に現存することを、渡辺一郎氏が確かめた。この小図三枚の原寸大のカラーコピーを研究用として有料で依頼中である。

②最近の静嘉堂文庫の目録には見当たらない。

以上のような文献の追跡調査では、写本③の航海用の海図として艦船で実用された多数の小図についての記載は、大谷著書だけで以後出てこない。結局、文政四年伊能小図三枚揃いは、英国だけにあって日本国内には見当たらないことになる。僅かな可能性として、副本②を旧海軍兵学校、現在の海上自衛隊第一術科学校に辿ることが残されており、これが今回の調査の動機となった。

三、海上自衛隊第一術科学校（広島県安芸郡江田島町）における調査

(1)日時 平成6年6月29日（水）

(2)教育参考館

旧海軍兵学校教育参考館は大正十四年に生徒館の中で始まり、昭和十一年に堅固美麗な現在の参考館が造られた。旧海軍兵学校の校域には、海上自衛隊幹部候補生学校、第一術科学校及び自衛隊江田島病院があるが、教育参考館を管理しているのは第一術科学校である。

教育参考館館長新宮武雄氏に、第一術科学校研究部企画室長 二等海佐 川口正之氏を通じて、上記調査を二日前に予め依頼した上で同校を訪れ、関係の文献のコピー等を渡して説明し、参考館応接室において館長から次のような所見を伺った。

(3)資料調査

①戦前の所蔵品目録は、海軍兵学校教育参考館図録（昭和九年六月三十日発行）に詳しいが、この中に伊能小図は無い。この図録は非売品で、当時の関係者に配られたようである。和綴じ帙入り。

②前記図録の後、昭和九年六月から昭和二十年八月迄の海軍時代の教育参考館の所蔵品目録は見当たらない。

③現在の教育参考館の所蔵品目録に関する印刷物は無い。帳簿として教育参考館寄付受台帳があるが、これは昭和三十一年一月に旧海軍兵学校が連合軍から返還されて、術科学校が横須賀から江田島に移転してから後の海上自衛隊の帳簿で、この中に伊能小図は無い。

(4)現物調査

現在の教育参考館の所蔵品（展示品及び収蔵品）の中に、伊能小図は無い。

(5)聞き取り調査

①昭和二十年八月の終戦後、呉市周辺に米軍が進駐し、後に英豪軍に交代した。海軍兵学校も接收され、約六〇年の歴史を閉じることになる。これに先立ち、参考館所蔵品の散逸を恐れ、当時の関係者が苦心の末、数箇所に疎開させた。（この項後述）

②終戦後、軍関係書類は日本全国にわたって、殆ど焼却処分されたと言われるが、兵学校でも三日三晩にわたって、グラウンドで燃やされたと言われている。

③昭和二十年九月十七日の台風による大水で呉市周辺は大きな被害を受けた。この時、参考館の地下も水没し、泥にまみれた資料

は処分されたと言われる。

④現館長新宮氏は三代目で、就任六年目を迎える。これまでの記憶の中に、伊能小図に関するものは無いとのことであった。

(6)聞き取り調査(続き)

当日午後、二代目館長狩山文治氏(昭和五年十二月〜平成元年三月在任)が来校することであったので、再度訪問し、参考館応接室で聞き取り調査を行った。内容は殆ど上記の三代目館長新宮氏と同じであったが、終戦後の所蔵品の疎開について詳しく聞くことが出来たので、次にまとめる。

①進駐軍の接収を恐れ、当時の教官達が苦勞して参考館所蔵品の疎開先を検討した。神社であれば大丈夫ではないかということで、厳島神社(広島県佐伯郡宮島町)と大山祇神社(愛媛県越智郡大三島町)の二箇所を選んで交渉し、所蔵品を移した。他に生徒の実家等もあつたやに聞く。

②保管を依頼した所蔵品のリストは、参考館には残っていない。

③昭和三十一年に術科学校は江田島に移転してきた。この機会に、再び参考館を整備しようということになり、両神社に返却を求め所蔵品が戻ってきた。横山大観の正気放光(富士山)の絵や、古代兵学書(鷺見文庫及び野沢文庫)がそれである。しかし伊能小図は記憶にない。

(7)第一術科学校図書館

念のため図書館も調査することとした。参考館と同じく図書館長に二日前に連絡し、伊能小図の存在を予め確かめて貰った。当日館長不在で、図書係長山佐信子氏に伺ったところ、書庫を含め伊能小図は見

当たらないとのことであった。

(8)調査結果

伊能小図(旧海兵)は第一術科学校では発見されなかったが、終戦後の神社へ疎開の話が新たに出てきた。この中に小図が含まれていないか。しかし、その時のリストが現在の参考館には残っていないので、直接両神社を訪れて確かめることにした。

四、厳島神社(広島県佐伯郡宮島町)における調査

(1)日時 平成6年7月29日(金)

(2)宝物館

ここでは、平清盛の平家納経三十三巻が有名である。展示品及び収蔵品の中に、伊能小図は無い。

(3)社務所

厳島神社彌宜飯田楯明氏は昭和三十七年からこの職に就かれており、宝物館の責任者でもある。飯田氏に伊能小図の概略を説明し、神戸市立博物館及び英国海事博物館の小図縮尺カラーコピーを示して伺ったが、伊能小図を見たことは無いとのことであった。

また、旧海兵の所蔵品を神社に預けた経緯について、第一術校側の話をお聞かせした所これも知らないとのことであった。しかし、数日後の飯田氏の書簡で次のような新たな事実が判明した。何らかの手掛かりを求めて、古い神社日誌を調べていくうちに、関連の記事を発見されたのである。

厳島神社日誌(抄録)

昭和20年9月22日(曇)

一、午前十一時、海軍兵学校教育参考館理事、海軍教授姉崎岩藏氏、数名ノ水兵引率左記物件奉納ノタメニ来社、野坂彌宜、安田主典応接ノ上、物件受領ス。

十一時三十分辞去セラル。

記

- 一、東郷元帥書 大二点
- 一、米内大将書 大二点
- 一、鈴木貫太郎大将書 中二点
- 一、島田大将書 中二点
- 一、山本英輔大将書 小二点
- 一、黒井大将書 小一点
- 一、広瀬中佐西伯利亚旅行写真 中二点
- 一、佐久間艇長遺言書写 小一点
- 一、横山大観筆富岳之図 大一点
- 軸物
- 一、東郷元帥書 二点
- 一、西郷従道元帥書 一点
- 一、伊藤元帥書 二点
- 一、上村大将書 一点
- 一、谷口大将書 一点
- 一、勝海舟書 二点
- 其他
- 一、乃木大将遺愛薙刀 一点
- 一、谷口大将即位式着用ノ冠並纓 二点
- 一、日高大将遺愛琵琶 一点

以上二十八点

昭和30年1月10日(吹雪)

一、海上自衛隊呉地方総監部より経理補給部長富崎作氏外式名来社、旧海軍兵学校より奉納の横山大観画伯筆富嶽の図外二十七点寄贈方願出あり、宝物館に於て宮司飯田権彌宜立会現品受領して辞去す。

約四十〜五十年前の日誌から、「参考館の貴重品を海兵から神社に奉納し、後年自衛隊側が全品寄贈受けした」ことが明瞭になった。但し、伊能小図はこの中に含まれていなかった。当時の海兵にとつて貴重品は元師大将の物であり、横山大観の絵一点を例外とする。

五、大山祇神社(愛媛県越智郡大三島町)における調査

(1)日時 平成6年8月4日(木)

(2)国宝館、紫陽殿、海事博物館

全国の国宝・重要文化財の指定を受けた武具類の八割がここに保存展示されている。また、昭和天皇の海洋生物研究に使用された葉山丸が海事博物館に永世保存されている。ここの展示品や収蔵品の中に伊能小図は無い。図録大山祇神社の中にも記載は無い。

(3)社務所

大山祇神社彌宜田中忠義氏に、大三島町元助役越智好人氏を通じて、予めこの調査の趣旨を説明した上で同神社を訪れた。田中彌宜は昭和三六年からこの職に就かれており、宝物館等の責任者でもある。

田中氏に伊能小図の概略を説明し、神戸市立博物館及び英国海事博物館の小図の縮尺カラーコピーを示して伺ったが「伊能小図は見たことが無い。旧海兵が所蔵品を神社に預けた事については承知している。そして預かった品物は後日返還したと聞いている」とのことであった。

ところで、上記葉山丸は戦争末期に海軍兵学校に預けられたが、終戦後、陛下の船を進駐軍に使用されるのを遺憾として、海兵は大山祇神社に保管を依頼した。昭和二十年九月十六日頃江田島から大三島まで回航する旨の文書が残っている。その後葉山丸は、英豪軍に接收、昭和二十四年暮に神社に返還、陛下に献上、海上保安庁巡視艇に編入して時々御利用、という経過を辿って、御採集船は昭和三十一年「はたぐも」昭和四七年「まつなみ」と変わっていく。葉山丸は廃船となった後、昭和四三年に大三島海事博物館で永久保存となった。

海軍兵学校教育参考館の貴重品を大山祇神社に疎開させた経緯も、葉山丸と同様であろうと思われる。田中彌宜の話によると、宝物殿の刀剣甲冑を進駐軍が武器とみなして接收することを恐れ、刀剣にはグリスを塗ったり菰で巻いたりして、民家に隠した。参考館からの預かり品も軍の物ということで民家に隠したということである。

六、別の伊能図について

(1) 第一術科学校教育参考館

海軍兵学校教育参考館図録（1934年6月発行）27頁に、別の伊能図があった。それは「伊能忠敬測量原図」で（伊能忠敬自筆ノ神奈川付近ノ地図ナリ 左ハ伊能忠敬筆ノ歌（写）並ニ伊能家蔵書目録写ニシテ此二者ハ何レモ古川庄八氏遺族ノ寄贈ニカカル）との説明がある。寄贈者は佐藤鉄太郎中将。写真三葉付。

国書総目録（岩波書店・補訂版第一刷（89年9月）282頁にある「伊能忠敬実測調製日本全図（旧海兵蔵）三葉（写真）」との関係が気になる所である。

この二つの資料にある伊能図は共に参考館に現存しない。

(2) 呉市入船山記念館（広島県呉市幸町四一六）

この記念館は、旧呉鎮守府司令長官官舎（県重文）や歴史民俗資料館などから成っている。旧海軍関係の資料の中に、伊能小図が万一にもあればという僅かな期待で訪れたが、ここに伊能小図は無い。館長の本原弘樹氏に収蔵品について尋ねたところ、別の伊能図があった。それは「浦島測量の図」で「文化三年（1806）三月に伊能忠敬ら測量方一行が呉浦周辺の測量を実施した時の様子を描いたもの」との説明がある。宮尾幾夫氏提供。

サイズは28 cm × 400 cmくらいで、彩色の絵図である。

七、むすび

伊能小図を求めて、江田島、宮島及び大三島と歩いた。約百七十年も前に作成された地図を求めて、約五十年前の存否を確かめようとしたわけであるが、結局発見されなかった。

秋岡論文にあるように、文政四年の伊能小図副本が第二次世界戦争以前に海軍兵学校に寄贈されたことは確かであろう。これが何処に行つたかを、出来るだけ客観的資料で追跡することが今回のテーマであった。それはある程度出来たと思われる。

特に、終戦後に貴重品を神社に疎開させた件について、神社側からの資料により、その内容が確認できたこと、後年それらが返還されたこと、その中に伊能小図は含まれていなかったことが確かめられた。

とすると、残るのは終戦直後の混乱の中で行われた書類焼却か、水害時の書類の処分かで失われた可能性が最も大きい。この流れの中で、何処かで生き延びて、何時の日か世間に小図が顔を出すことを期待するのは夢であろうか。

ここまで書いてきて思う事は、敗戦直後の関係者の御苦勞である。それは、今からでは想像もできない程大変であつたろうと思われるが、残念さ、虚しさ、責任感などの緋い交ぜの中での軍関係者の努力と、それを受け止めて、九年余も立派に保存した神社関係者に敬意を表したい。

〔謝辞〕

今回の調査に関して御協力頂いた、海上自衛隊第一術科学学校校長落合海将補、川口二佐、参考館長新宮氏、前館長狩山氏、大三島町役場元助役越智氏に感謝します。また、貴重な資料を頂いた厳島神社飯田彌宜、大山祇神社田中彌宜に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 渡辺一郎「伊能忠敬作「日本全図」(伊能図)の所在と現況について」
研究ノート(非売品) 93年7月 22 39頁
- 大谷亮吉「伊能忠敬」岩波書店大正6年 609、610頁
- 秋岡武次郎「伊能忠敬作成の日本諸地図の現存するものの若干」
地学雑誌 76巻6号昭和42年43、44頁
- 岩波書店「国書総目録」岩波書店1版63年11月18日 282頁
補訂版第1刷89年9月6日
- 海軍兵学校「教育参考館図録」海軍兵学校昭和9年6月30日
印刷所 東京市小石川区音羽町 合名会社双文館
- 三島喜徳 図録「大山祇神社」大山祇神社 平成5年4月再版
- 三島喜徳 「昭和天皇御採集船葉山丸」大三島海事博物館

平成元年3月再刊

徳山市で「ミニ歩測大会」開催

会員の永野達代さんのホームページを見た徳山高専の桑嶋さんから要請があり、忠敬関係の資料を送ったところこんな返事が来ました。「去る九月八日に山口県徳山市の徳山高専土木建築工学科でミニイベントを開催しました。ポスター等を作成してブースに展示したり、市民参加の歩測大会も行いました。30m位の距離を歩いてその距離を予測してもらい、上位三人には賞状と賞品をわたしました。ミニ歩測大会はこれからも続けていくつもりです。誰でも気楽に楽しめるイベントとして、裾野が広がっていくべきだと思います。また密かな野望としては、小学校に出前講座として、前半はおはなし、後半はミニ歩測大会を行えば楽しいかなと考えています」

永野さんは「会場では市民に随分忠敬さんの宣伝をしてくださったようです。ブース内左のパネルは徳山付近の中図ですが、伊藤さんの『徳山測量と平山郡蔵の袴紛失事件』をならべているようです。徳山市民にとっては随分興味深い展示だったでしょう。徳山から若い忠敬ファンが沢山うまれそうです」と。次のニュースが楽しみです。



徳山高専の展示と会場風景

忠敬と間宮林蔵 (二)

安藤 由紀子

ゴロウニン事件

忠敬と林蔵が西と北に分かれた同じ文化八年、幕府は測量目的のロシア軍艦の艦長ゴロウニンなどを、クナシリ島で捕らえた。ロシアはシヤナ事件を私的な略奪であつたと詫びて全員の釈放を求めてきた。

忠敬と別れて文化九年二月蝦夷地に入つた林蔵は測量の完成が任務であつた事は明らかだが、ゴロウニンにも興味を持ち度々会いに行つてゐる。このロシア人の傑作『日本俘虜実記』から引用してみよう。

『日本俘虜実記』徳力慎太郎訳 講談社 三〇三頁

その頃我われのところへ一人の新顔がやつて来た。これは日本の首都から派遣されてきた測量家で天文学者の間宮林蔵と名のる者であつた。

……彼は毎日のように我われの所へ通つてきてほとんど朝から晩まで過ごし、自分の旅行の話をしたり自分で描いた地図や風景画をみせたりした。……彼の虚栄心は大変なもので、絶えず自分の手柄と旅行中の苦勞談を語つて聞かせ、そのよい証拠には旅行中持ち歩いて自分で食物を煮炊きした鍋を見せ、獄舎の囲炉裏で毎日その鍋で何かしら煮たり焼いたりして食べ我われにも振舞つた。

……(シヤナ事件に触れて)「あのあと日本側では船を三艘仕立ててオ

ホーツクに送り出し同市を壊滅しようとおもつていた」と話した。(我われがからかうと)林蔵は腹を立てて、「日本人は戦争にかけては、どの国にも負けない」と断言した。……そして太陽と月、または星との距離からその場所の経度探知ができると聞いてきて、どのようにして知るか、我われからその方法を習得したがつていた。……こちらが断ると、この日本人は大変不機嫌になつて「まもなく首都からオランダ語の通訳と日本人の学者が来て、學術關係の若干の事項について説明を求めることになつてゐる。そのとき、拒否は出来ませんぞ。否が応でも聞き出してみせる」と威嚇した。

舞台でも見てゐるように、林蔵の動作が生き生きと描かれている。

幕府は彼らを釈放する方針だったが、林蔵は最後まで反対したという。文化十年十月、二年二ヶ月以上も続いた監禁の末ゴロウニンたちは日本を去り、その後五十年ほど日露間には平和がおとずれた。

間宮林蔵の本格的な蝦夷測量が続けられた。熱中すると俗世間の事はどこかへ吹っ飛んでしまふのが彼の常であつたらしい。ゴロウニン事件が解決した二年ほど後の、某宛忠敬書簡の下書きに次のようなくだりがある。文化十二・三年の頃である。

B 二三 伊能忠敬書簡下書き 世田谷伊能家文書

(大谷亮吉著 「伊能忠敬」による)

(前略)間宮林蔵もまだ蝦夷地にいるようです。『東韃紀行』お書き写しの由、愚老は一覧もしていません。ご承知のとおり年来の門人ではありますが、偏人なので文通もしておりません。

忠敬も偏人ではあるが、世間の流儀は守りすぎるくらいの人であったから、糸の切れた凧のような林蔵の偏人ぶりには付いていけない所があったのであろう。

最後の出会い

三回目の出会いは文化十四年、忠敬の死の前年であった。

林蔵の蝦夷地測量に関しては、その経過を知る資料は全くと言ってよいほどない。併し測量は文化十三年頃には大体終わったものである。林蔵はその成果を手に勇んで江戸に帰ってきた。忠敬は全国測量を終え、図の完成におおわらわだった。絶妙のタイミングで蝦夷図が届いたのだった。歴史の不思議が感じられる。



蝦夷地沿海実測図(伊能・間宮図)1821年
北海道大学付属図書館所蔵

林蔵の資料は伊能図の完成に大いに貢献した。忠敬は第一次測量で、南の沿岸を測量しただけだからその功績は大きい。測線は海岸だけでなく、川をさかのぼって内陸深くにもおよんでいる。現地の人だけが頼りだったであろうから、一人も同然でここまでやれたのか、疑問に思うくらいだ。

大谷亮吉氏は間宮林蔵の仕事について次のように書いている。

大谷亮吉 『伊能忠敬』 岩波書店 七三八頁

間宮は新しく学習した(忠敬より)緯度測定方を利用し、大いに蝦夷地の実測に力を尽くしたことは疑いがない。…これらの材料に基づき忠敬が調整した蝦夷地方図によって林蔵の測量の精度をみると、忠敬が内地においておこなったものと比べれば遜色なしとはいえないが、交通不便にして跋涉困難だった蝦夷地当時の状態を追想すればむしろその比較的精良なのに驚かざるを得ない。

二つの図を継ぎ足すのに手間と時間がかかったのであろう。それで林蔵は忠敬の家に同居することになったらしく、忠敬が佐原の娘、妙薫に出した手紙に林蔵に言及した部分が多くなる。

八六 伊能忠敬書簡 妙薫宛 千葉県資料 近世篇

文化十四年十月二日

(前略) 玉子の値段一ツ十一文宛の由、承知しました。間宮に七十ほどもらいまして、今は充分栄養を取っております。…今度間宮が三治郎と鉄之助(孫)へ上等の南部絹の反物二反、土産に持ってきてま

文化十四年十二月六日

した。せっかくの親切ではありますが、三治郎、鉄之助二十歳くらいまでそのままにしておくのもあまりにのびのびになりますから、内々でよき買人でもありましたら一先ず売って、外の反物にでも取り替えたなら如何でしょうか。ご相談します。遠慮なくご意見お聞かせください。追々又お便りします。

十月二日

東河父

なお、間宮も今度は同宿を願い、一緒にいますので家の内も特別にぎやかにしました。早々に入扶持も昨日五俵送ってきました。以上

間宮は、お金持ちだった。それに忠敏に対する気の使い方をみると、何かに夢中になっているときでなければ、世間の流儀に忠実だった人のようだ。「海峡」の報奨金で百両もらったし、当時松前奉行支配下役で三十俵三人扶持を得、しかも妻帯もせず一人暮らしだったから、ちゃんとおみやげ持参で、食い扶持まで持ってきた律義者である。

そして絹は子供にはもったいないから内々に売って他の反物に取り替えたかどうかというの、いかにも忠敏らしい考え方だ。値打ちのあるものを置きつ放しにするのは無駄である、というわけだ。金は動かして価値を持つ、価値のあるものは使つてこそ意味がある、という商人、金貸し業の考え方である。第一次測量をほとんど自力で賄う金力は、このようにして得たものだった。

地図作りの業者たちの食事は、おやつまで含めて全部忠敏持ちであつた。薪や炭もそうであつた。ときには不足がちのこともあつて、林蔵持参の米が、役に立った。

九三

伊能忠敬書簡

妙薫宛

千葉県資料

近世篇

こちらの飯米の件ですが、間宮林蔵方より四斗二升入りのもの五俵、佐原本家から津左衛門の船で十五俵積み入れてくれたので、来年三月初めまでは、間に合います。

一一

伊能忠敬書簡

妙薫宛

千葉県資料 近世篇

文化十四年十二月二十二日

こちらの生活費の件：：間宮林蔵が金二十両も所持しているので、どうやら都合つきそうです。正月早々に十両でも二十両でもお送りください。

忠敏は翌文化十五年（文政元年）四月十三日に亡くなった。林蔵はすでに自宅に帰っていたが、その枕辺にいたのではないかと勝手に私は想像している。

二人はその根気強さと意思の強さで、非常に似通っていた。やはり並みの人間ではない。しかし根のところで、忠敏は商人であり、林蔵は農民であつた。二人はともに頑固であつたが林蔵は融通がきかなかつたのに反し忠敏は頭が柔らかだった。後に述べるシーボルト事件をみるとはつきりする。

その後の間宮林蔵

忠敏が亡くなったあと、伊能一家は悲運に見舞われた。後継ぎの孫忠誨はまだやつと十三歳だった。しかも忠敏の没年に母と弟を亡くし、四年後にはたった一人残つた肉親の伯母、妙薫まで亡くしてしまった。

十七歳の時である。

忠誨は祖父忠敬の死後、五人扶持をもらい、そのほかに八十五坪の町屋敷を箔屋町というところに拝領した。何軒かの長屋になっいて、その家賃を収入として受け取った。当時そういう風習であった。忠誨は、天文方雇いのまま佐原に戻って家業を継いでいたので、この長屋の家賃を林蔵が預かって、一時家政の面倒もみていたらしい。

幕府は、対口関係が鎮まってきたので、蝦夷地の直轄管理を止め松前藩に返した。これで幕府の蝦夷地役人であった華々しい林蔵の前半生は終わった。蝦夷地あつての間宮林蔵だったからである。

文政七年御備場掛手付を命ぜられ、天保四年足高二十俵増給、文政十一年伊豆諸島巡検の差し添え役を勤め、また特別の隠密御用で、数度、遠国へ出張したこと、これらの事以外、詳しいことは何も分かっていない。前半生と比べるといかにも余生という感じがする。

忠敬の没後丁度十年たつて、文政十一年にシーボルト事件が起こった。孫忠誨は事件の前年病没していたので、忠敬の血族はもう伊能家にはおらず、親戚から夫婦養子が入っていた。

したがってここで事件の詳細を述べるのは、蛇足と言つてもよいのだが、こと伊能図に関する事だから簡単に述べておこう。

林蔵が高橋景保を通じてシーボルトから貰った小包を、封を切らずに上役へ差し出したことから事件は起こった。中には、布地と蝦夷地の葉草についての簡単な手紙が入っていただけだった。小包の提出は、当時法律的に正当な行為であった。しかし幕府はシーボルトと高橋景保の関係を異常に神経を尖らせるようになった。

帰国を前にして日本のコレクションを満載したシーボルトの船は大風に遭遇し、座礁した。積荷は調べられ国禁の品々、日本絵図の一部等が出てきた。伊能測量の総指揮者であつた高橋景保が捕らえられ、

欲しかった本とひきかえに伊能図の写しをシーボルトに渡したことを白状した。彼は取調べ中に獄死した。

林蔵の行為については沢山の本が書かれ、白熱の論争が今も続いている。私は、幕府の法律に対する林蔵の農民的視野のせまさと頑固さのなせる技ではなかったかと思つてゐる。こんな大事件になるとは、彼自身思つていなかったのではなからうか。事件が起こった時彼は、伊能図を外に出さないように伊能関係者に忠告してまわつたらしい。

「隠密」という言葉の語感は今とはちがいが、幕藩体制下では、それはごくありふれた職業であつた。

また、水戸の徳川斉昭や幕臣川路聖謨とも接触をもつた。彼の蝦夷地に関する専門知識が生きたのである。

林蔵は妻子なく一人であつたが、「りき」という署名の、病状を故郷に知らせる手紙が残つており、忠敬の女中に「りき」という人がいることから、同一人ではないかとも言われている。身のまわりの世話をしていたのかもしれない。

「自分は農民だから、土分の後継ぎはいらない」と普段からいつていたそうだが、死後、後継ぎが入り、江東区に立派な二つ目の土分の墓がある。小貝川の墓の方が、林蔵に似合うと私は思うのだが：。

参考文献

大谷亮吉「伊能忠敬」

岩波書店

洞富雄「間宮林蔵」

吉川弘文館

世田谷伊能家文書 B 二十三

伊能忠敬書簡 八十六 九十三 十二 千葉県資料近世篇

ゴロウニン・徳力真太郎訳 「日本俘虜実記」 講談社

小谷野敦「間宮林蔵（隠密説）の虚実」 教育出版

加賀藩天文曆学者 西村太冲(三)

河崎 倫代

五、再び金沢へ(つづき)

3 金沢町測量事業

二十年ぶりの金沢暮らしがはじまった。太冲は五四歳になっていた。再び金沢へ呼ばれた理由は、翌文政五(一八二二)年間一月、遠藤高環の監督の下でスタートした金沢町測量・絵図作製事業に、太冲の天文学理論と知識が必要とされたからである。メンバーは太冲・河野久太郎・日下理兵衛(国老村井又兵衛の家臣)・早川理兵衛(遠藤の甥玉井主税の家臣)・三角風藏(割場付足軽)らで、この測量チームが加賀藩を代表する科学者グループへと成長していくのである。

この頃、石黒信由は加越能三州測量・絵図作製を命じられていた。文化五(一八〇八)年一月の金沢城二の丸御殿の火災で多くの絵図が焼失した。その後、藩が新たに差し出させた各郡の見取り絵図の中で、ひとときわすられた射水郡絵図の製作者が石黒だったのである。石黒は文政二(一八一九)年四月より約三年半かけて藩内全域を測量し、文政七年に加賀・越中・能登三州十二郡の絵図を、翌年には加越能各国一枚ずつの国絵図と三国を一枚に合成した「加越能三州郡分略絵図」を完成させ、藩に提出した。

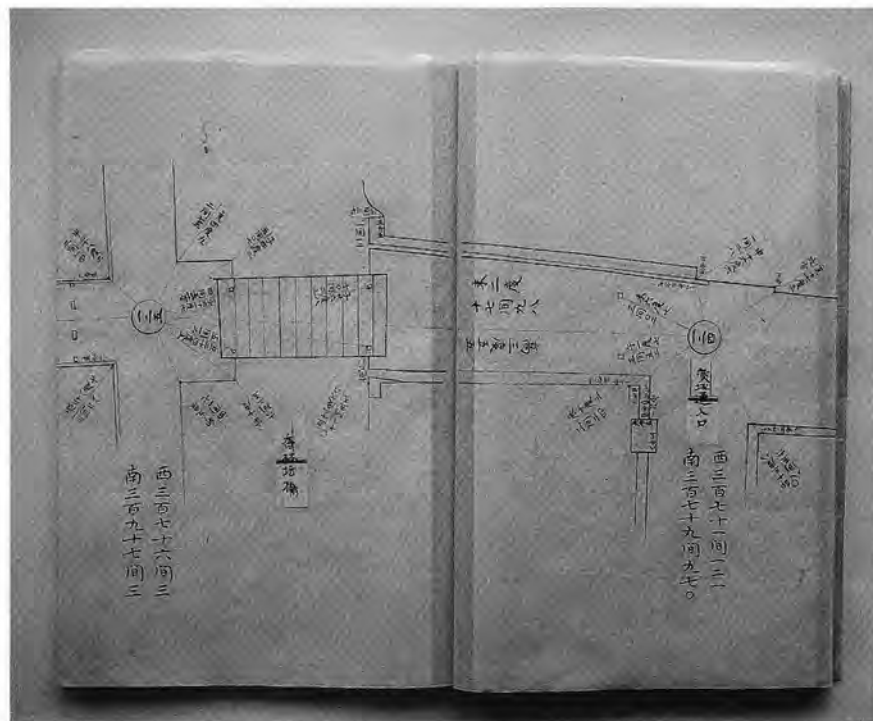
遠藤は金沢町測量事業をスタートさせるにあたって、文政二年に石黒に測量・製図器具一式を調達させた。遠藤が文政十三年十一月に記

した『金沢御絵図仕立方術書』には、測量器具の多くは「越中高木村の石黒藤右衛門が文政二年の三州御絵図御用で用いたものを口受し、さらに増補・工夫を加えて製造した」とある。石黒は遠藤に器具一式を差し上げたあとも、金沢出府の折りには遠藤宅を訪問し、時には太冲や河野らを交えて打ち合わせを重ねている。石黒自身は百姓身分だったので金沢城下測量には参加できなかったとされる。

太冲はこの事業の理論面を支えていたものと思われる。遠藤の前掲書には「天文家用いるところの象限儀」といった記述があり、太冲の理論や知識が応用されていた。また算書『八線百分表』について、「西村篤行所蔵の、暦算に専ら用いる書」を金沢町測量にも利用したことが記されている。これは現在の三角関数表で、高低のある土地の測量には欠くことができないものである。これまで、本多利明が文化六(一八〇九)年に加賀藩に招かれて「藩内に初めて八線使用法を伝えた」とされてきたが、寛政十二(一八〇〇)年に石黒信由が太冲から『八線表』を借りている。「藩内に初めて八線使用法を伝えた」のは太冲だったのだ。このこと一つ見ても、太冲が「忘れられた」科学者だったことがわかるだろう。

金沢町測量は文政五年二月、金沢城尾坂門(大手門)下の四つ辻からスタートした。ここを測量原点とし、文政八年六月までの約三年間に、「金沢町中、五千三百余ヶ所に磁石を据え」て、合計三七八日間行われた。当時太冲はすでに「西村太冲老」と記される年齢であり、実際の測量作業にはあまり出勤していない。測量終了後は製図作業が進められ、絵図十九枚を含むすべての完成は天保元(一八三〇)年十二月であった。現在、石川県立図書館に『御次御用金沢十九枚御絵図』『金沢測量図籍』『金沢草図』などが保管され、一般の閲覧が可能である。

この測量の特徴は、道幅を細かく測定し、辻では道の分かれる方位を正確に測定したことである。図には細かい数値がていねいに記載されている。さらに、文政七（一八二四）年には、磁石の針と真の北が



「金沢測量図籍」香林坊橋付近(石川県立図書館蔵)

本当に一致しているかどうかを確かめている。

金沢町測量では、太冲が大坂から持ち帰った象限儀や八線表など最新の器具と新理論・新知識をベースに、忠敬との出会いによって向上した石黒の測量技術・測量器具、それに遠藤や河野らの工夫・改良が加わって、全国的に見てもおそらく例のない精密な実測図が作成されたのである。

六、時制の改革

1 十二代藩主前田斉広

金沢町測量と同時進行的に遠藤グループに命じられた次の仕事は、「時制の改革」という一大事業だった。加賀藩では十二代藩主斉広が、文化年間に経世家本多利明や蘭学医藤井方亭・吉田長淑を召し抱えるなど、蘭学の風潮を金沢にも取り入れようとした。さらに斉広は現在の兼六園の地にあった藩校を移転し、跡地に竹沢御殿を造成させた。文政五（一八二二）年に隠居した斉広は、独自に教諭局を設置し、城内の幼主斉泰に代わり、城外の竹沢御殿で自由に藩政に取り組もうとした。この隠居政治は城内の重臣たちとの軋轢を増した。

2 加賀藩の十三分割法

江戸時代の時刻制度は、現在のように一日を二十四等分割した定時法ではなく、日の出前の暁ごろを「明け六つ」、日の入り後の夕暮れごろを「暮れ六つ」と呼び、それを基準に昼を六等分、夜を六等分し、それぞれの時間を「一つ（とき）」といった。さらにその間を取って「半」とし、夜・昼それぞれを十二等分割していた。これを不定時法と呼ぶ。

加賀藩では承応元（一六五二）年以来、日の出前と日の入り前の「一とき」を、慣習的に「一とき半」程度の長さにして、昼・夜をそれぞれ十三分割するという独自の時刻制度を採用していた。これは江戸幕府や他藩の時刻制度と異なっていたので、改正の命令が下ったものと思われる。

遠藤を中心に、太冲ら金沢町測量のメンバーが時制の改革にもたずさわった。まず初めに正確な時計が必要とされ、太冲の指導の下で天体観測用の振り子式時計「垂揺球儀」を改良した「正時版符天機」を作製した。これによって時刻がきちんと定義された。次に太陽の高さを計算で求めて、地平線よりマイナス十三度にあるときを「明け六つ」「暮れ六つ」と規定した。文政六年八月より、竹沢御殿の時鐘は十二分割の新時法で撞かれた。時刻制度の改革は人々にとっては生活の混乱を招き、すぐにはなじめなかった。特に夜明けの時刻が従来に比べ早すぎて、実質的な労働時間延長と受けとられ、大工などの反発があったという。

新制度施行後わずか一年の文政七年七月十日、前藩主斉広は猛威を振るっていた麻疹のために病死した。すぐに金沢城内の反斉広派の巻き返しをはじめ、竹沢御殿も早々に取り壊されてしまった。十二月には時法も旧来の十三分割法にもどされた。しかし、遠藤や太冲らは十三等分割の新時法を考案して、翌年五月には藩の許可の下で実施した。こうして金沢では、独自の改正十三分割法のまま、明治五（一八七二）年の太陽暦導入を迎えたのである。幕府や他藩と同じ十二分割法に変えようとしたことは間違ひではなかったはずだ。また改革にとりもなう生活の混乱も予想される範囲である。庶民の反発は、夜明けの規定を一部手直しするなどの処置で収まったものではなからうか。失敗の最大要因は、前藩主斉広という強力な推進者を失ったことであろう。

七、金沢での天体観測

1 ポンス彗星の観測

金沢城下の測量・作図作業はおよそ八年間続けられたが、その間にも太冲は天体観測をおこなっている。文政五年十二月十五日夜の月食観測は、金沢彦三番町の遠藤の屋敷内かその近所でおこなわれた。また文政八年八月から九月にかけて約二週間、金沢の夜空に現れたポンス彗星を連続観測し、彗星の位置、移動、尾の長さなど詳細で正確な観察記録を残した。「西村篤行社中」と記された観測チームのほとんどは金沢町測量メンバーで、太冲は垂揺球儀を担当した。

ポンス彗星の観測で用いた望遠鏡は、沢田義門が所有していた麻田立達製のものであろう。立達は麻田剛立の甥で、のちに養子となった人物である。剛立亡き後、生活苦の中にいた立達に間重富は望遠鏡のレンズ磨きを覚えさせ、当時第一級品とされていた岩橋善兵衛製の望遠鏡より優秀との評価を受けるまでになっていた。河野久太郎の書状には、沢田が立達製の望遠鏡を入手したいきさつが書かれている。

「沢田は太冲の門人で、立達に金子を送って製作を依頼していたが、なかなかできなかった。そのうち幕府から蒲賀の番所の望遠鏡を仰せ付けられ、立達は丹精こめて二器製作した。上品を幕府に納め、控えの方を沢田へ寄越したが、加賀ではこのように性能のよい望遠鏡は見たことがない」

八代將軍吉宗以来の天文ブームは金沢でも続いており、望遠鏡を持ち寄って精度を競う集まりがあったらしい。天保五（一八三四）年四月、前田式部邸から庚申塚を見たところ、沢田の立達製望遠鏡では卒塔婆の文字が見えたが、河野が持参したものでは見えなかったと、河野自身が『日用雑記』に記している。立達製は格段の性能だったのだ。

石川県内には江戸後期の望遠鏡が何台か確認されているが、まだ立達製は発見されていない。島根県松江市に住む沢田義門の子孫宅にも見当たらないという。

2 気朔暦の発行

太沖は文政八年から毎年金沢を基準にした「気朔暦」を作成し藩に提出した。尊經閣文庫に残る太沖の「気朔暦」は従来のはと異なり、日食・月食の予測を中心とした天文暦であった。金沢における二十四節気や時鐘改刻日も測定し記載している。太沖の死後は後継者の四男政行が作成した。

また毎年、一枚摺りの略暦（カレンダー）を作り同志に配っていた。太沖が作成した最後の略暦「天保六年金府日時用略」が石川県立歴史博物館に残っている。

八、太沖の死と後継者たち

天保六年五月二日、太沖は六十八年の生涯を終えた。死の床にあつて太沖は自らの人生を省みて何を思ったであろうか。また、高橋至時や間重富が生きていたならば、何と言ったであろうか。「まだまだ未熟で一生お世話ものだと思っていたのに、よくまあこれまでにあったものだ。」と安堵したであろうか。高橋や間が知る太沖はまだ三十代。天才的だった二人に比べると「まだまだ未熟」だった。明倫堂講師を辞して、京・大坂へ出ることもままならず城端で二十年間を過ごすうちに、高橋も間も亡くなった。

しかし、再び太沖は見いだされた。遠藤という優れた上司の下で、河野や石黒といった、ある時は弟子であり、ある時は師でもある優れ

た仲間とともに、金沢町測量や時制の改革といった諸藩に例を見ないユニークな事業にたずさわってきた。そのどちらにも京都・大坂で学んだ太沖の知識と経験が必要とされた。さらに身銭を切って購入した測量器具や天体観測機器がそれらの事業の成功のカギでもあったのだから、太沖の人生はある意味では充実した悔いがないものだったと言える。

伊能忠敬が内灘海岸（石川県内灘町）で、警戒心のためビリビリしている案内役の十村の手代や村役人たちに話した言葉がある。「今回の測量御用は、測天量地といって、天を測り地を量る作業だけです。村々の領域を調べている訳ではありません」。忠敬の言葉を借りるなら、太沖こそは加賀藩にあつて、「天を測り、地を量り、そして時も計った」人物だったということになる。

1 門人たち

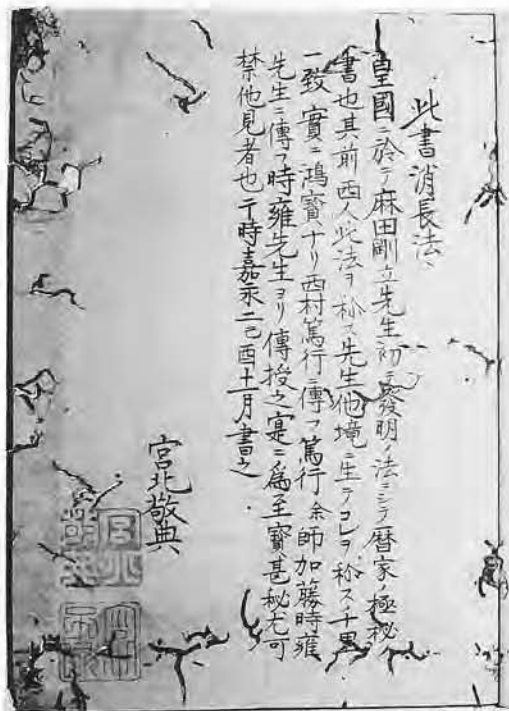
天文暦学者西村太沖の門人として、麻田剛立直伝の「歳実消長法」を伝授された茶室康哉と小原時雍を上げ、この二人と小原の弟子宮北敬典の三人について紹介したい。

茶室は京都の人で、土御門家の門人河野通礼と太沖に学び、著書に『本朝曆象考成』『本朝曆象考成約編』『茶室曆書』『符天曆再編』などがある。小原は加賀藩土菊地大学の家臣小原平右衛門の子だが、加藤家に養子に入り加藤九八郎と称した。のち黒川良安について蘭学を修め、加賀藩洋式兵学校壮猶館で指導にあたった。小原一白とは別人である。城端町教育委員会には小原が作成した暦が残っている。弟子の宮北が写したものである。宮北は『実験録附録消長法』に次のように記している。

「この書は麻田剛立先生が初めて発明した法であつて、曆家の極秘

書である。麻田先生が西村篤行に伝え、篤行が私の師加藤時雍先生に伝え、時雍先生より私が伝授されたものである」

麻田→太冲→小原(加藤)→宮北という師弟関係が簡潔に示されている。宮北が推歩作成した安政七年と明治四年の暦が残っている。



「実験録附属消長法」(城端町教育委員会蔵)

2 太冲の子孫たち

太冲は四男一女をもうけた。長男は十一郎と称し、京都へ出て父に代わって西村遠里の後を継いだ。三男は早世したという。太冲の後を継いだのは四男政行である。佐左衛門と称し、加賀藩より医員格として父の十五人扶持のうち七人扶持をたまわって、「気朔暦」「金府日時用略」を続けて発行した。尊経閣文庫には嘉永二年までの「気朔暦」

が残っている。また天体観測も行っていた。越中氷見町の田中屋権右衛門の『応響雜記』には次のように記されている。太冲の死の翌年、天保七年九月十五日のことである。

「米室白裕(太冲の弟子)に誘われて、友人らと西村氏の月食観測を見にいったところ、門弟が大勢来ていた。そのうち遠藤敦馬(高環)様と沢田義門様もお越しになった」

遠藤や沢田は太冲の後継者としての政行の天体観測を見守っていたのであろうか。

よみがえる太冲

大正十年頃、イギリスの天文台から京都帝国大学へ東洋暦学書の翻訳依頼があり、その中に太冲の著書も含まれていた。京都から金沢の史談会へ問い合わせがきて初めて、忘れられていた天文暦学者西村太冲の存在が知られ、調査がはじまったという。その結果、大正十二年、金沢の太田南圃氏によつて野田山墓地の「得一館西村先生墓」が発見され、碑文の解説によつて太冲の業績が明らかになった。太田氏は後に、太冲の墓碑探しは大槻如電から依頼されたと語っている。太冲発見の経緯についてはまだ不明なことが多い。

昭和九年七月、城端神明社の境内に「西村太冲先生碑」が建てられ、故郷の人々の心に太冲の名が刻まれることになった。それから六十余年たった平成十三年五月二一日の命日には、破損が進んでいた台座の修復も完成した。これを機に、加賀藩天文暦学者西村太冲とその仲間たちの業績に、再びスポットライトがあたることを期待したい。

全国津々浦々の「伊能忠敬に出会った人」と「伊能忠敬に出会えなかった人」たちにも、二十一世紀の光があてられますように。―完―



「得一館西村先生墓」と碑文(金沢市野田山)



西村太冲先生碑(城端神明社)

参考文献

- 洲崎哲二『西村太冲事蹟』西村先生碑建設協賛会 一九三四年
 渡辺敏夫『近世日本科学史と麻田剛立』雄山閣 一九七三年
 『近世日本文学史』恒星社厚生閣 一九八五年
 有坂隆道「寛政期における麻田派天文学家の活動をめぐって」
 『日本洋学史の研究Ⅴ』創元社 一九七九年
 渡辺誠・布村克志『加賀藩・富山藩の天文暦学』
 富山市科学文化センター 一九八七年
 『加賀藩史料』前田育徳会
 『大分県先哲叢書 麻田剛立資料集』大分県教育委員会 一九九九年
 『大分県先哲叢書 麻田剛立』大分県教育委員会 二〇〇〇年
 金沢市立近世史料館『河野文庫』
 新湊市博物館『高樹文庫』

『伊能忠敬は長寿だったか』

―階層別からみた考察―

石川 清一

一、はじめに

人生八〇年と云われる高齢化時代をむかえ近年、如何に生きるべきかについての本が花盛りである。最近も日野原重明聖路加国際病院理事長著「人生百年私の工夫」、石原慎太郎東京都知事の「老いてこそ人生」が出て反響を呼んでいる。一読し、各著者の示唆に富んだ含蓄のあるお話に共感を覚えるところも多かった。

人生五〇年と云われた江戸時代に、伊能忠敬は前半生は商家の家業に精励し、後半生の五〇才からは第二の人生を志し本格的に学び、五才から全国の測量を開始し、以後一七年間かけて我国初めての实测による高精度の日本地図を完成した。人生を二度生きた男とも云われ高齢化時代の中高年の星である。

私の住んでいる九州には六四才からの二度に亘る測量行で、いずれも江戸から途中測量しながら二、四ヶ月かけて小倉まで来て、そこから長期間かかる測量に入り、屋久島、対馬、五島等困難な遠方の島々まで行った。この時七〇才。驚くべきパワーである。現代なら東京から小倉まで新幹線で五時間弱。飛行機なら一時間半ちよつとでこれる。当時は足で歩いて来、測る、わけです。あらためて昔の人は丈夫だったとつくづく思う。

測量の旅は丁度現代のビジネスマンの単身赴任か出張生活に似ている。しかも宿泊地が毎日変わり（時には連泊もあるが）、日々のデス

クワーク（これも大変な作業）だけでなく少々の風雨でも屋外の作業や、夜の天測もする肉体労働であり、このような苛酷な生活を長期間、しかも六〇才を越えた高令期に入って続けたこのことに吃驚し、感動させられる。もしかしたら江戸時代は私たちが考える以上に伊能忠敬以上の元氣な七〇才、八〇才の長寿の方が多かったのだろうか。忠敬は本当に長寿だったのか。

そんな中で、たまたま当研究会会報のかわら版「伊能忠敬研究」2000年7月第4号で渡辺一郎氏が歴史のメモ帳「伊能忠敬は長寿だったか」と題し、いろいろ述べておられたのが契機になり、その後折々の機会に調べたものを少しまとめた。

（まだ整理の途中で中間的なもの）

二、先ず、庶民からみて一般的には衣、食、住他全ての環境が最高レベルにあったと考えられる階層はどうか。

* 天皇 …………… 四八・七才

一六一七（元和三）年没の第一〇七代後陽成天皇（四七才没）
から一八六六（慶応二）年没第二二一代孝明天皇（三六才没）
までの歴代天皇一五人の平均

* 貴族 …………… 六五・五才

一六一二（慶長一七）年没の関白太政大臣近衛前久（七七才）
から一八七一（明治四）年没の関白左大臣九条尚忠（七四才）
までの主な貴人一八人の平均。

意外であった。何が原因かはいろいろ考えられるが本稿の目的ではないので省く。

三、次に、やはり衣、食、住等の環境が最高レベルにあったと考えられる將軍についてみてみる。

*** 徳川將軍 …… 四九・六才**

江戸幕府を開いた初代徳川家康（七五才）から第十四家茂（二一才）まで歴代一四人の將軍の平均。

最後の將軍第十五代徳川慶喜（七七才）は大変長命であり明治維新の元勳たち西郷、大久保、更に岩倉具視、勝海舟、伊藤博文らの死を見送り、なんと一九一三（大正二）年まで生きた。慶喜は例外とし除外した。もし歴代一五人の平均を出すと、五一・五才である。

先ほどの天皇、貴族、と同様意外に短命であった。環境や・生活条件の良さは必ずしも長寿につながらないようである。

*** 足利將軍 …… 三九・七才**

では、参考までに徳川時代よりかなり遡るが足利將軍をみてみた。

室町幕府を開いた一三五八（延文三）年没の初代足利尊氏（五四才）から、最後の將軍一五九七（慶長二）年没の義昭（六一才）まで歴代將軍一五人の平均。

四、続いて、衣、食、住の環境等は高レベルにあったが、青壮年時に戦乱を戦い抜き身体を酷使したが、勝者となった後は安定した生活を送った戦国武將や、その末裔達はどうか。

*** 大名・旗本 …… 六五・二才**

加藤清正（五〇才）黒田長政（五六才）伊達政宗（七〇才）大久保彦左衛門（八〇才）上杉治憲（七二才）水野忠邦（五八才）や伊能測量を支援した老中松平定信（七二才）若年寄

堀田正敦（七五才）など主な大名・旗本三一人の平均。

忠敬はさして頑健でもなく、測量は長旅の連続であり・衣・食・住なども上記の層より良いと思われない生活環境の中で七四才まで生きた。

五、それでは当時のスポーツマンと言うべき剣術家等は身体にも恵まれ、常日頃鍛練していたはずで、武道家はきつと長命だったに違い。結果は、

*** 武道家（剣、馬、弓、槍、柔術家、力士）…… 六二・七才**

荒木又右衛門（四〇才）高田又兵衛（八三才）宮本武蔵（六二才）柳生宗矩（七六才）関口柔心（七三才）雷電為右衛門（五九才）千葉周作（六二才）不知火諾右衛門（五四才）等名だたる武道家二一人の平均である。

意外や意外。超一流武道家は身体を酷使しすぎるせいか、必ずしも長生きには結びつかないようだ。これは現代でも当てはまるようである。

六、松崎俊久編「寿命、どこまで伸びる？」（栄大選書）によれば、頭を使うことが長寿の秘訣の一つであり、職業別の長寿者No.1は宗教家、哲学者であり、No.2は科学者、芸術家、文学者であるとのことである。

*** 宗教家（僧侶、神官）…… 七〇・七才**

江戸時代の一〇四人をみてみた結果である。僧侶、神官はインテリ階級であり、生活環境も高レベルで長命の印象が強い。確かに吟味してみると八〇才以上の長命な僧侶もかなりみられるが、反面三〇〜五〇才で亡くなる方も同じくらいおり平均を下げている。

*芸術家、文学者、学者、商人(俳人を除く)…… 七〇・七才

画家、作家等はどうか。有名な「養生訓」の作者、貝原益軒(八五才)はさすがに長命。近松門左衛門(七二才) 井原西鶴(五二才) 新井白石(六九才) 三井高利(七三才) 狩野探幽(七三才) 喜多川歌麿(五四才) 賀茂真淵(七三才) 等三人の平均。

宗教家と同様やはり長命である。

七、次に俳人を見てみる。芸術家、文学者と別にしたのは、実はこの俳人との比較こそが「忠敬が長寿かどうか」がわかると考えたからである。それは江戸時代の俳人の多くは吟行に、旅に出て歩くことが多く行脚俳人といわれ忠敬と生活環境が似ているように思うからである。

*俳人…… 六八・二才

江戸期の三大俳人と云われた松尾芭蕉(五一才) 与謝蕪村(六八才) 小林一茶(六五才) の平均は六一・三才である。更に去来(五四才) 三千風(六九才) 其角(四七才) 曾良(六二才) 許六(六〇才) 杉風(八六才) 等抽出した七七人の平均である。

七四才まで生きた忠敬はやはり長命であつたと言える。

八、そこで、もう一つ追跡してみた。やはり生活環境が似ていたと考えられる同業に近い方達はどうか。

*忠敬と同時代頃の探検家、学者…… 六九・二才

長久保赤水(八五才) 最上徳内(八二才) 間宮林蔵(七〇才) 近藤重蔵(五九才) 古川古松軒(八二才) 松田伝十郎(七五才) 麻田剛立(六六才) 間重富(六一才) 等一五人の平均。

この結果からみても、やはり長命であつた。納得。

九、一般庶民(農民、町民等)

一番人口の多い層であるが正確な統計が無く、研究も多く出されているが、調べる程にわからなくなる。出土した江戸期の人骨や、寺院に残る宗門帳から推計してみた研究が多い。ただ当時の乳幼児の死亡率が異常にたかく、出土人骨も少く、宗門帳でも除かれている事が多く、この分を修正して考える必要がある。

松崎俊久編「寿命・どこまで伸びる？」(栄大選書)によれば、長野県虎岩村、岐阜県飛騨村、奈良県北葛城郡河合村等各地の例を推計すると、一五才時の平均余命は三五〜四〇才位(平均死亡年令は五〇才前後か)のようである。また鬼頭宏著「人口から読む日本の歴史」(講談社学術文庫)によれば、農民階層でも、階層差があつたと言う。

又平均寿命の変遷に関し、小泉明編「人口と寿命」(東大出版会)や黒田俊夫著「日本人の寿命」(日経新書)にいろいろの調査がありもう少し調べてみたい。

一〇、ここで少し角度を変えて。私は茶道を少しやっているので関心のある茶人達はどうだったかをみた。

*茶人…… 五三・三才

千利休の流れを汲む三千家の1600年頃から1900年頃迄の各家元をみた。表千家一四代〜十一代、裏千家一四代〜十一代、武者小路千家一初代〜八代までの三千家元二四人の平均である。

意外な結果であり、理由はよくわからない。

「生没年は井ノ部康之著「利休その後三千家のルーツをたずねて」

(ベスト新書) から]

一一、今回女性はデータが少ないので俳人以外は除いたが、若干ビツクアップしてみると。

*女性の歴史上の有名な人物…………… 七一・五才

千姫(七〇才) ねね(七七才) 春日局(六五才) 桂昌院(七九才) 絵島(六一才) 笠森お仙(七七才) 六人の平均。
長命である。生活環境によるものだろうか。

一二、さいごに(結論)

以上の結果から伊能忠敬は階層別に比較して確かに長寿であった。

一般庶民層を除き、今回抽出した三七八人の平均は六四・九八才であり、約九才長寿である。

また、人口構成的に圧倒的に多い一般庶民(農民、町民)を含めれば非常に長寿であったといえる。

ただ、一般庶民層(特に、苛酷な労働の下、衣、食、住の生活環境が良くなかった農民層)を除いた階層は意外に長寿者が多かったのではないか、という気がする。

〇生没年については次の二冊を参考にした。

『日本史総合年表』加藤友康編 吉川弘文館 2001年刊

『日本史人物生没年表』日外アソシエーツ編集部編

紀伊国屋書店 1997年刊

北九州市の都市基準点が移設 伊能記念碑に

昨春秋に完成をみた小倉の「伊能測量二百年記念碑」の紫川側プレートに北九州市都市基準点の移設が完了し、八月二日関係者に披露された。この記念碑は、村井、熊谷、石川、穂吉さんほか会員のみなさま方のご努力で誕生したもの。

従来は北九州市庁舎屋上に都市基準点(一級基準点)があったが、今年から日本で地球上の経度や緯度を表示する「世界測地系」が導入されたのに伴って、記念碑を市の測量基準点とするために移設された。

(福岡市・石川清一氏より)



*穂吉正明さんが入会されました。どうぞよろしく。

都市基準点の完成まで

村井 純孝

かねてより懸案となっていました都市基準点 No. 20001号はようやく測量成果の発表とまで漕ぎつけ、去る八月二日除幕いたしました。この度の測量は世界座標 GRS 84 及び ITRF 系に基づく北九州市最初の記念すべき点で、除幕式にて九州地測部長根本寿男氏の話の中にも「……二百年前に九州測量の起点となった伊能先生の基準点が、今茲に世界の座標系に同席することになりました。故人も喜んでいることでしょう……」とありましたが、私共も全く同感で、何かしら感激を覚えます。

実はこの一級都市基準点は当初私の計画では、平井山二等三角点、三萩野三等三角点、望玄荘四等三角点、以上の三点を使用して測量する計画であり、この計画書を提出しました。ところが九州地方測量部から「そこまでやるなら、いつそ電子基準点を使ってやってはどうだ」というサゼッションがあり、「これは良いことを聞いた。面白い。今までに電子基準点は一度も使った経験がない。これはよい機会だ。自分で一生一代の記念事業になるか……」等考えて勇躍して取組んだことでした。たとえ人工衛星からの電波を受信し観測するとしても、20数kmもあるところに於いて信用のおける精度が保証されるかと心配もありましたが。

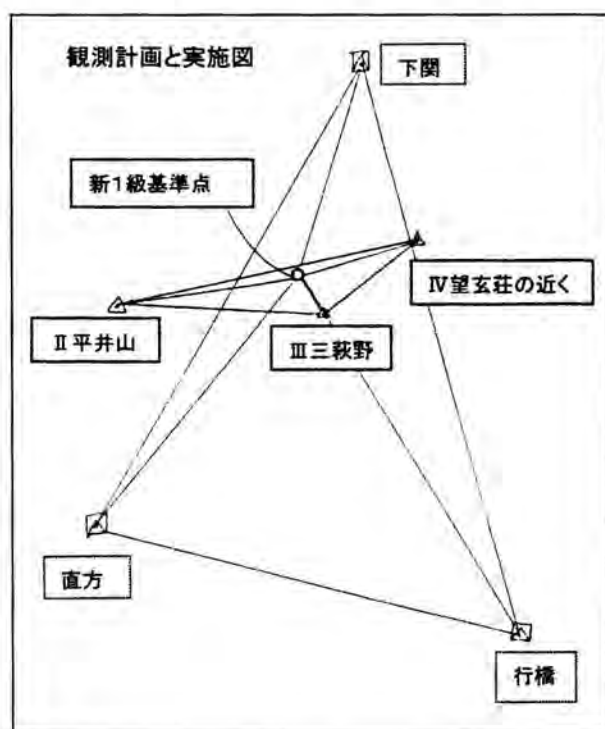
三つの三角形に於いて各々隣接する辺は二つの三角形に共通のものです。12km 19km 24km に於いて南北方向のズレ(誤差)は、3mm 0mm 3mm、東西方向に於いて2mm 4mm 1mm という極めて小さな違いであ

りました。高さの違いは16mm 0mm 14mm でした。このような結果でありましたので、標高は近くの一等水準点から直接水準測量によって決定いたしました。

光や電波は真空中に於いて30万km/秒も飛ぶというのに、僅か地球の上空2万km上を飛んでいる人工衛星からでは2/30秒ですが、原子時計という奴はよくもよくもこの電波を捉えて地球上の距離を算定するものだとかくわからないことばかりです。

ともあれ、二百年前の位置は今も尚燦然と光り輝いていることで忠敬先生も笑ってこの点を見ているだろうと思います。

(伊能忠敬記念碑建設実行委員会会長)



芳名録より

— 佐原伊能家を訪れた人々 —

端座して深奥の学

きはめられし

面影しのぶ八畳の

部屋

大正九年十一月二十二日

忠敬先生の書齋にて 内ヶ崎作三郎

うちがさき さくさぶろう（一八七七一—一九四七）

大正・昭和期の学者・政治家。早大教授となり、社会政策を研究。

大正十三年憲政会から代議士に当選し、以後当選七回。田中義一内閣の治安維持法改定に反対し、浜口内閣の内務参与官。第一次近衛内閣の文部政務次官、衆院副議長をへて民政党総務、大政翼賛会総務などを歴任した。
（三省堂コンサイス人名辞典）

面影しのぶ八畳の
即ち

端座して深奥の学
きはめられし

大正九年十一月二十二日
忠敬先生の書齋にて 内ヶ崎作三郎

現存する四冊の芳名録の中で、一番古い日付は大正六年である。

明治二十二年芝公園に遺功表が建立され、大正六年には大谷亮吉著「伊能忠敬」が発行され、大正八年佐原の諏訪公園に銅像が建てられるという流れの中での大正九年。忠敬から五代目にあたる祖母こうは五十三才。（佐原の旧宅で生まれ、八十八才で生涯を終えるまで遺品の管理をした）

感慨にふける訪問者の傍らで、こちらもちんと正座の、若き日の祖母の姿が目に見えようとする。
（伊能陽子）

多良海道（長崎脇街道）

―その追分をめぐって―

松尾 紀成

1 肥前の長崎路

肥前長崎は、西海の複雑な半島や入り込んだ内海の先にある。



2 長崎脇街道（多良海道）の分岐点について（図口を参照）

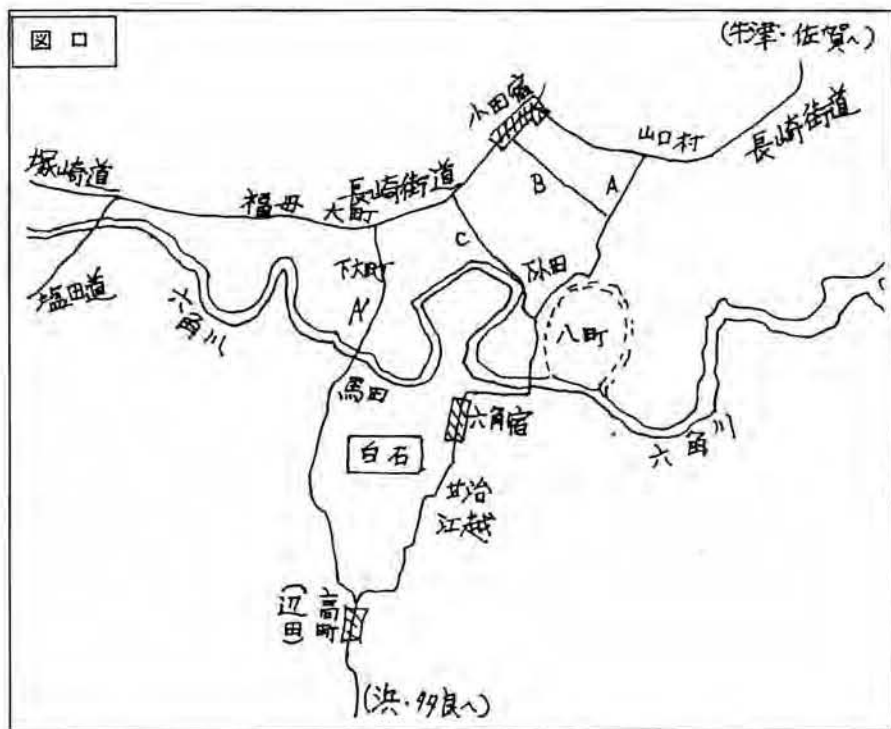
佐賀・牛津の平野部を過ぎると、長崎街道は杵島郡の山つき、現、肥前山口から小田、大町へと山の南の裾を縫うように走っている。街道の南方には六角川が蛇行し「袋」と呼ばれる大黒様の大袋のような地形を幾つもつくり東流する。六角川沿いの地域は、水はけが悪く湿地帯が多かった。そのためか、ここを横切り、白石方面に向かう道は長崎への近道であるにもかかわらず、時期により紆余曲折の変遷が見られる。

古くは「慶長国絵図」に示された山口・六角渡ししの最短の道筋がある。何かの理由でこの道筋が消え（恐らく、水害とこの付近の治水干拓工事、八町の切り開き、六角川の蛇行を直流へ河道改修（天和年間1681～83）工事による交通遮断であろう）、代わって「正保・元禄国絵図」（図口A）が、やや山手へ迂回し大町・馬田渡しで、より詳しく描かれた道筋が登場する。その後、江戸も後期になって六角渡しが再開され、六角宿・浜・多良へと長崎脇街道が整えられた。

その、分岐点をめぐって、ある会合で論議を呼んだ。

市町村史や郷土史、地名関係の書籍をみると、長崎街道から白石六角通りへの分岐点は必ずしも一致した見解ではない。長崎街道の宿場町として各地への分岐点があり、交通上重要な場所であったとする小田宿分岐説を唱えるものは多いが、では六角・浜道の有明海沿岸を通る多良往來の追分地点は、具体的に何処なのかというところ「小田宿よりも東で分岐」、いや「小田宿そのものから南下」「小田宿よりも西」と三様の記述がある。図で示そう。

Aは、山口―六角―浜道。この道筋は慶長国絵図とほぼ同じ道筋。
 Bは、小田宿の観音下から分岐する六角―浜道。
 Cは、小田宿の西、大町町との境から南下するという六角―浜道。



以上ABC三道筋のどれが正規の「多良往来」（長崎脇街道）と云えるのかと問題になった。いずれも同一の六角渡しを舟渡りすること、この渡し場については問題はない。

佐賀藩の法令に「鳥ノ子御帳」がある。その中に「上使衆領中往来之時之仕組」、『鳥栖市史資料編第三集』がでている。

「九州え上使御下向之由候ハ、大坂出船日限之儀申遣候こと天滴え可申越候、但此方かまいなき上使衆候半は、右之不及聞合事、付、黒川与兵衛殿・甲斐庄喜右衛門殿上下之儀は、毎年之事候条、能々不及申遣候便も候ハ、出船之儀可申越候事」

幕府役人（上使）の領内通過について気を配っている。大半は、長崎への下向と長崎から江府への上りである。有明海渡海が、重要な道筋と認識されていたが、……また陸路通行のこともあるとして、「多良海道一通之掃除并両所之水小屋（矢答峠、山茶花峠の水小屋）刑部太夫（鹿島）・豊前守（諫早）より兼而誘致弓・鉄砲之者之間、老人付置可申事」

とあり、「多良海道」の名前が登場する。道や橋の掃除・修理、宿々では上使到着のさいはおけ水を打ち、夜になれば町中あんどんを差し出すべきこと等細かな達しがある。

長崎奉行の黒川与兵衛と甲斐庄喜右衛門の名が記されていることから、承応く万治年間の多良海道整備であろう。肥前国の絵図では、「正保国絵図」があり、小田―（大町・馬田）―高町―浜のルートで、一里塚書き込みで地図上でも整備された。六角宿を通らない、Aの道筋であろう。

この絵図は、元禄年間に幾分の変更を加えているが、大きな差はなく「正保・元禄国絵図」と呼ばれ、元禄期に白石通過で長崎へ（逆に佐賀方面へ）向かう正規の道筋は、これを辿ったと考えるのが順当で

あろう。

しかし、江戸後期になると六角渡しが復活し、西の馬田に代わって東の六角宿が賑わってくる。問題は、この六角渡し（現在の六角橋東下）が再開されてから、長崎脇街道・六角通りの分岐点である。前掲図で、三様の見解があると述べたが、大勢はBとCである。

『佐賀県地名大辞典』では、「小田宿は、長崎街道二十五宿の一つで、東の牛津宿と西の鳴瀬宿の中間に位置する。この宿駅から南下して白石郷・鹿島城下を経由して諫早に出る長崎脇街道が通じる」とあるが、同書地誌編、江北町では「小田宿はまた長崎街道の脇街道、いわゆる浜通りの分岐点でもあった。すなわち長崎街道から大町、江北両町の境で分かれて南下し、六角渡しから六角宿・高町・竜王峠を経て鹿島・諫早・長崎へ達したのである」とCのコースを述べながらも「しかしながら、『慶長国絵図』には既に山口・六角・須古・高町への道は描かれているにもかかわらず、この小田・六角の道は見当らない。また『正保国絵図』などには小田よりもっと西方の大町・馬田・高町道しか描かれていない」と、疑問を残す。

3 伊能忠敬測量日記

文化九年（1812）九月、幕府測量方伊能勘解由の本隊が、伊万里（桃ノ川）から北方に出て、北方・大町・小田・牛津と長崎街道を測量した。

『伊能忠敬測量日記』（佐久間達夫校訂、大空社）に「十七日、朝小雨、段々晴、六ッ後北方町出立。長崎街道を測」とある。北方の追分で長崎街道塩田道に触れている。「但し、武雄道本街道。塩田は近道、両道嬉野にて出合う」。

福母村から大町の上・下「人家続き町並、人家百六十四軒」とある。

この大町から「元禄国絵図」にある馬田渡しの浜道がでてくる筈であるがそれには触れていない。此のころになると正規の浜通り「脇街道」は、下流の六角渡しに代わっていたからであらうか。藩の事前の「村絵図」や「書上」、地元案内役も触れなかったとみえる。

小田に入って「上小田村枝楯原、上小田宿本町、人家入口、左に樟大木九十間計り。根元に馬頭観音を彫る、行基の作という。又左二十間計り上に若宮八幡宮あり。左制札前問屋場追分より一里二十一町二十三間、止宿入口迄三町十間」とあり、止宿を本陣伝右衛門と別宿利七の二ヶ所に分宿している。

小田宿で馬頭観音が出てくるのは当然であるが、「又左二十間計り上に若宮八幡あり」この若宮八幡を馬頭観音より数町か数間先の左と解釈すると誤ってしまう。佐賀藩の「上小田村絵図」（嘉永七）をみたら馬頭観音の背後に「若宮社」がある。測量日記の「八幡」とは違うと思っていると多久藩の絵図「御私領南目往還筋の図」（多久市郷土資料館蔵）に同位置に「八幡」と書いてある。まさしく若宮八幡である。シーボルトの『江戸参府紀行』に馬頭観音のスケッチがあり鳥居が描かれている。馬頭観音の鳥居かと見違えるばかりである。実は若宮八幡の鳥居である。現在は鳥居も若宮八幡社も消滅している。

大町から小田宿まで、『伊能忠敬測量日記』（前掲書）をたどる限り、六角・浜道の分岐（多良山越え長崎脇街道）の記載はない。

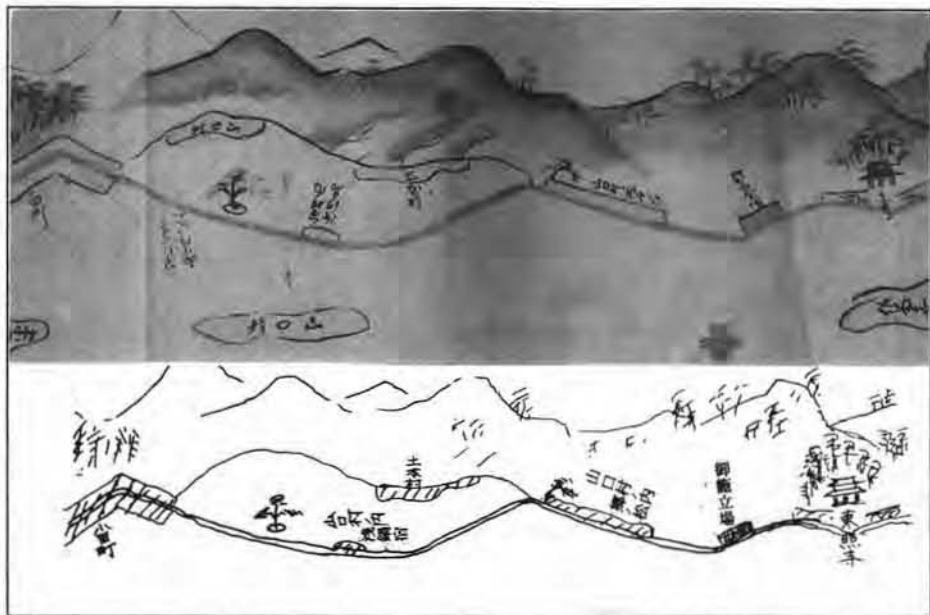
しかし次の「十八日、上小田宿出立」の後「山口村枝麻鍋宿、宇土本、枝郷松、六角道追分、外十五間打出印を残す。此道多良山越長崎街道近道、左に禅宗東照寺、佐留志村宇佐留志宿、（後略）」とある。伊能測量隊は文化九年九月十八日、小田宿を発って山口村に至って「六角道追分」、いわゆる六角通りの分岐点が山口村の郷ノ松にあると記録

した。そして「此道多良山越長崎街道近道」と多良海道の追分であることを明確に言い切った。まさに晴天の霹靂である。

「測量日記」の地名を現地で確かめ地図上に位置つけると、麻鍋、土本。「朝鍋」「土元」は現在もこの地名が存在する。しかし郷松は不明。測量日記の記述の順序からすると朝鍋、土元の次が「郷松」で、東照寺よりも手前（西）にあるはずである。見当をつけて土地の人に聞いてみるが、知らないという。八十になる婆さんは、ここは新宿と昔から言っていたという。

前掲の多久藩の絵図をみると、小田町を過ぎ東進すると〇の中に一本松を描いた一里松があり、次に小さな集落に山口村ノ内 浅鍋宿と書いてある。街道から離れているが背後の山手の集落には土本村とあり、街道が山裾に達し、土本村から来た細い道と合するあたりに、もう一本の松があり、集落が山裾を東に伸びている。「山口村ノ内郷ノ松」の郷の字を「令」をつぶしたような書き方である。念の為、多久市の郷土資料館に地名の確かめのため閲覧を申し込むと、古文書に造詣の深い松江信彦氏と一緒に閲覧できるよう取り計らってもらい、間違いない「郷ノ松」であることがわかった。あと御駕籠立場があり、東照寺の建物が描かれている。場所は、JR肥前山口駅左前方の山手で、新宿の位置である。

この絵図は元禄年間のもので六角道は描かれていないが測量日記の「郷松」の位置は明らかになった。六角道追分、多良山越道の分岐点を推察すると現在の国道207号線を北へ国道34号線を横切って山裾に突き当たった所、長崎街道との接点である。この道は、慶長国絵図に描出された道筋であり、冒頭の〈図ロ〉ではAにあたる六角・浜道である。江戸後期になって慶長期の道が復活したとみてよからう。



*多久市郷土資料館所蔵『御私領南目往還筋の図』小田ノ山口郷ノ松（新宿）付近。長崎街道沿いの主な風物。〇に松（一里塚）、浅鍋宿の小さな集落、背後に土本村、郷ノ松の集落がみえる。元禄期の絵図で脇街道は描かれていない。

4 山口・六角道に対する反論

前述の会では当然のことながら、異論がでた。その主張をあげると
①鹿島の領主が佐賀行きの場合、小田宿を利用（宿泊・休憩）すれば、六角・山口・小田と、山口・小田が逆戻りになり不自然。
②伊能忠敬測量隊は沿岸測量が主であつて、例え測量隊が測量したとしても殿様が通るような正規の道とは言えない。
と、二点に要約される。

①については確かに、不自然である。しかし鹿島領主の小田宿利用が何時頃のことか、時期に注意する必要があるとはいかないか。

論拠となっている「鹿島領主の小田宿利用」の事跡は、『鹿島藩日記』（三好不二雄編纂校註、祐徳稲荷神社）に登場する。『鹿島藩日記』は貞享三年（宝永六年迄）の五巻が刊行されている。

なかでも元禄十三年（1700）の佐賀本藩二代の丹後守光茂の病没前後四月・五月にかけ、鹿島（支藩）二代藩主鍋島直條の佐賀御見舞がしばしばなされ、その際小田宿がみえる。その中で注目されるのは、五月十八日、光茂死去後、佐賀から帰還する藩主を出迎えに鹿島の家臣たちが小田宿まで出向いている。「御迎之者共、小田追分迄段々罷越候、金子百疋、小田客屋番へ、今日御休ニ付而被拝領候」とある。迎えに出ている場所が「小田追分」とあり、この追分は小田宿の東の入り口付近で、多久への追分と推察する。なぜなら家臣の迎えを受けた後、藩主は客屋に入つて昼休みをとつたと考えるのが自然である。小田・六角道の記録は、この時期のものはいまだ管見にして知らない。まだまだ元禄期は八町付近の治水工事に難渋していたのではないだろうか。

ところが、鹿島五代の鍋島直熙（なおひろ）の明和年間になると様

子が変わるのである。

明和六年（1769）、江戸から鹿島帰着の道筋をみよう。

「一、六月六日大里（北九州）御着、同九日神埼御泊、明十日牛

津御泊ニ付、御迎之小道具、足輕其外今日より罷越、古瀬宮迄

御迎、山崎次郎右衛門、大塚六郎左衛門罷越。

一、今日山口御休迄、備州二方（前藩主直郷夫妻方）より御弁当

一与充岸川市之允を以被差上之。

一、今昼九時、鹿島被遊御着座」

『佐賀県近世史料第一編第五巻』頁144とある。

牛津御泊、翌朝は山口御休である。山口御休のあとは鹿島御着座である。小田宿御休は見えない。

元禄の頃は小田宿休みであつたものが、明和のこの時期、山口御休（同書130頁、明和四年も）に変わつて注目に値するべきであろう。

②は伊能忠敬測量隊が初期の私設測量隊的なものとは、後期の第八次（九州第二次）の測量では大きく性格を異にしている事を念頭に置いてみたい。

「これより以後（第五次）これまでの私的測量から公儀測量となり、沿岸測量から内陸部の測量も加わり、当時の主要交通路を網羅するものとなつた」（熊本史学「伊能忠敬の九州測量」城後尚年）。同書に伊能測量隊が求めたものに「村絵図」と「書上」の提出があり、「書上」の雛形が示されているが省略する。

先触は、海浜、浦々、島々、問屋、年寄、名主、組頭中と測量予定

の沿道の村方宛てになつてゐるが、もちろん藩の全面的な指導、支援がなければ勤まらない。

以上の事から明らかなように、伊能測量隊が長崎街道から白石・六角方面への脇街道の分岐点を取り上げるのは、当然のことである。事前に提出されていた「村絵図」や「書上」の中にもこの脇街道の道筋が提示されていたのであろう。だからこそ、翌十月二十三日、改めて郷ノ松から「下小田村下村」→「仏ノ津」・六角川幅四十八間、舟渡し、渡った所⑧印迄三十三町二十間、→六角中郷村六角町、駅次、止宿前迄九町十五間」と測量し、この道を「多良越往来」として、一里六町三十五間と測つたのである。

5 結論

伊能測量隊が、山口村の郷ノ松を「六角道追分」と選定したいきさつについて、勿論、伊能測量隊自身は他所者で土地不案内であり、追分地点の選定などできようはずはない。庄屋、大庄屋、佐賀藩付添い役など測量隊の案内に立つたものが、案内したのであろう。しかしこれも事前の準備に「村絵図」と「書上」を伊能測量隊は求めており、山口村の「郷松」や六角川渡し場の「仏ノ津」の地名など、絵図か書上によつて案内をしたのであろう。そしてこの絵図や書上は佐賀藩の息がかつたものと云うことができる。だから、山口→六角→高町→浜→多良を「多良越往来」と呼び、少なくとも文化九年段階では、この道筋が長崎脇街道「多良海道」であると佐賀藩では認定していたものと思われる。

六角川の治水、八町の切り開きが天和年間（1681-83）と云われているので伊能測量隊がこの道を測量するまでに、およそ百年を越える年月が経っている。この間、山口村から八町の旧六角川（古川）

堤防付近の治水、干拓が進捗し、六角川渡しが開かれたのであろう。

時期の確定は難しいが、郷村の古図を組み合わせてみると天明・寛政の頃から、六角渡しがあり、山口→六角の道がみえる。が、一枚の地図に位置づけられたのは伊能図で、明治の「輯製二十万分の一図」にも多良往来の道がでている。しかし注意すべきは、浜・湯江間の海岸道路は明治十八年以降の県道開削による。江戸期の本道は山越え道である。測量隊も浜からは、沿海測量である。

ここで、文化十四年と幕末の嘉永七年に、この「多良往来」をたどつた二つの旅の記録を紹介し、稿の結びとしたい。

元肥後藩士で幕末長崎で国学、歌道の塾を開いていた中島広足は嘉永七年（1854）佐賀で野中古水・古川松根らと遊び、長崎へ帰る道中を著わした「佐嘉日記」があるが、佐賀を午頃発つて長崎街道牛津宿を過ぎ西へ向かつた。

「……もとこし道の山口といふより左にわかれ行、こたびは多良越えといふ山路を越えてかへらむと思えばなりけり。六角川といふを渡り六角の里にやどる。」と三月廿五日の項。翌日は「……浜といふ処にやすらひて昼のものなど食ふ。ここより登る山路なだらかにて、松の木立いとしげし」とある（傍線筆者）。

また、長崎県小長井町の人で、赤司理右衛門安俊は夫婦で文化十四年（1817）二月から同五月にかけ大阪・高野山・奈良・伊勢・京都を九十六日を要して巡つた旅日記「都廻道之記」を書いてゐるが、やはり多良越え道を通り、帰路の五月十一日には、山口の「人形屋」という旅籠に米札五升を支払つて宿泊。翌日は、一気に六角・浜・多良と歩き、糸岐（太良町）の知人宅に寄り、帰着の挨拶と留守中の安否を聞き合わせ、息災を確かめ、心せくまゝ夫婦は山路を登り「山茶花

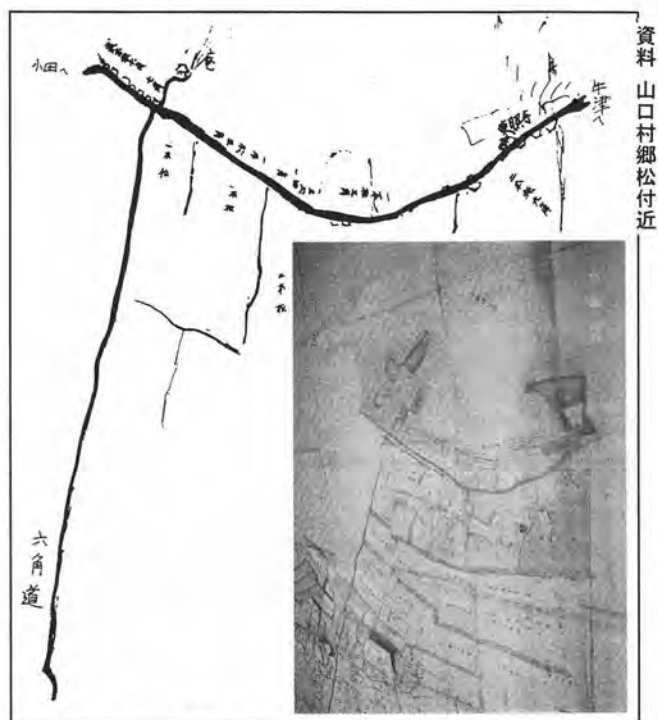
の茶屋より日暮れ、草臥れも忘れて帰着のよろこび筆紙に尽し難くと、感動をもって結んでいる。

『多良海道』―資料「佐嘉日記」―「都廻道之記」

多良海道地図作成委員会編

以上のように国学者の中島広足や豪農の赤司理右衛門も、山口、六角の「多良越往来」多良海道を歩いたのである。

(まつお のりよし・佐賀県塩田町・長崎街道研究家)



佐賀藩絵図(古地図・佐賀県立図書館蔵)

横辺田東郷 山口村東分 397×230 天明八年



田中馨治氏の顕彰碑・昭和7年建立、在太良町多良

当時郡長だった田中氏は七浦、多良、大浦海岸の県道開通の必要性を痛感し、明治18年鹿島県道落成を機に、その開削工事に着手した。それまでの本道は山越え道だった。

講演要旨

伊能忠敬の測量した丹波丹後の道

小林 清

はじめに

江戸時代の中頃になると、長崎を窓口にして西欧の学問が入ってくる。それに影響され、医学、天文学、暦学、測量などが広く学ばれるようになった。その中の一人に丹州の数学者万尾時春という人がいた。丹波篠山藩士で享保七年(1722)「見立算規矩分等集」二巻を著し、その中に四方六面様合曲尺という測量器(今のアリダードに相当する)や、逆目方位盤などを紹介している。八代將軍吉宗の頃である。吉宗の禁書緩和政策もあり、天文学、暦学、測量学は一段と発達した。享保十七年には伊勢の村井昌弘が「量地指南」を著し測量法や測量器を説いている。ついで麻田剛立門下の高橋至時とその弟子伊能忠敬が見られる。麻田一門は更に新しい西洋の学説を取り入れ、暦学の必要上から地球の大きさを知る為に子午線一度の距離を求めた。寛政十二年(1800)蝦夷地の第一次測量から第十次測量まで十七年間、四万^二地球一周の距離を歩いて測量した。

子午線への夢：地球の大きさを求めて

忠敬は江戸修学時から子午線一度を求める為に大いに力を注いだ。師の高橋至時に、そんな短い距離では正確な数値を得ることは困難であると諭され、機会を待った。時の情勢と幕閣の説得に成功し蝦夷地測量が実現、ここに子午線への夢が実現する。度重なる困難のうち、享和三年第四次測量で子午線一度の数値が確定し、師弟が抱き合

って喜んだという。

忠敬は地図をつくるよりも子午線一度の距離を求めるのが目的であったという人がいるが私はそうではないと思う。忠敬は立派な地図をつくる使命感をもって、子午線一度の距離と地図づくりは不離一体として愚直なまでに追い続け、「天下の宝とやらん」と言っていた。その結果次のような記念すべき数値を得る。「二八・二里」この数値がいかに確度の高いものであるか比較してみよう。

| | | | |
|--------------|---------|----------|-------------|
| 伊能忠敬の数値 | 28・2里 | 110・87km | 1803年(享和三年) |
| フランスの数値 | | 111・02km | 1760年頃 |
| フランス・メートル委員会 | | 110・90km | 1792~1799年 |
| 理科年表 | 35°~40° | 110・95km | 1983年版 |

歩いて日本国中を測量

伊能忠敬は日本国中を歩いて測量をした。人生一生分はたつぷり働き、五十歳で隠居。二度目の人生は五年間高橋至時の元で、天文、暦学、測量、地理学、数学を学び、全国測量の大道に立ち向かった。時五十五歳。十七年間で測量に要した日数は3753日になる。

測量した延長距離

| | | | | |
|---------|-------|-----|-----|------------|
| 海岸線 | 3792里 | 16町 | 1間 | 14894・07km |
| 島・湖沼の周囲 | 1746里 | 11町 | 14間 | 6858・29km |
| 街道 | 3048里 | 10町 | 19間 | 11971・54km |
| 合計 | 8587里 | 1町 | 14間 | 33723・90km |

伊能測量と伊能図

伊能忠敬の測量法については、忠敬の弟子尾形慶助(後に渡辺慎・

和算家会田安明の子供）が「伊能東河先生流量地伝習録」という一冊を残している。その中に「間縄（間棹）」「磁石」「水盛り、象限器」「分間」「分度器、厘尺（曲尺）」「絵図仕立」「町見」の七項目について述べている。この本を見て感心したのは、測量道具としての役割、機能、測量方法の役割、位置付けが有機的に結び合って説明していることである。

伊能測量はこの当時一般におこなわれていた方法と変わりなく、導線法である。忠敬はそれを丁寧に行い、誤差を少なくすることをこころがけて日本全国を完成させた。

曲線に沿い、折点に杭を打ち直線の連続となるようにする。杭の傍らに梵天を立てて、直線間の距離と方位を測る。距離は忠敬が考案した鉄鎖を用い、鉄鎖は内法一尺の鉄線を両端の環で六十本繋いだもので、毎朝狂いが無いかを間棹で検査した。

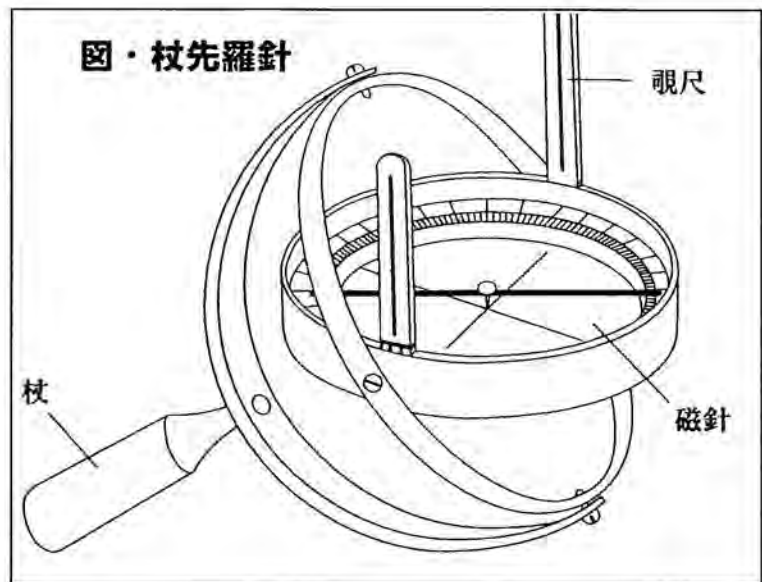
間棹は、長さ二間であるが一間二本継ぎであるのは使いやすく持ち歩きにも便利である。短い距離や岩場や鉄鎖の使い難い場所で、距離の見当をつけたら、川幅を三角法で測るのに役立ったであろう。

傾斜のある峠道、山道では携帯用の小象限儀を使い傾斜勾配を測り、「割円八線表」という現在の三角関数表のような表によって平面距離の計算をしている。

方位の測量は折点毎に緻密な測量を行っている。方位盤は一本の杖先に羅針盤を取り付けジャイロコンパスのように、据え付け場所が不安定でも、杖が傾いても羅針盤は水平を保つようになっている。伊能測量の中で最も便利に役立った器具である。この方位盤の目盛りが、逆目になっているので目標点を方位盤の「北」合わせると、羅針の「南」が目標点の方位として読み取れる至って簡単即決である。

方角を測るときは、正・副二本の羅針が一組となって測定し、その

図・杖先羅針

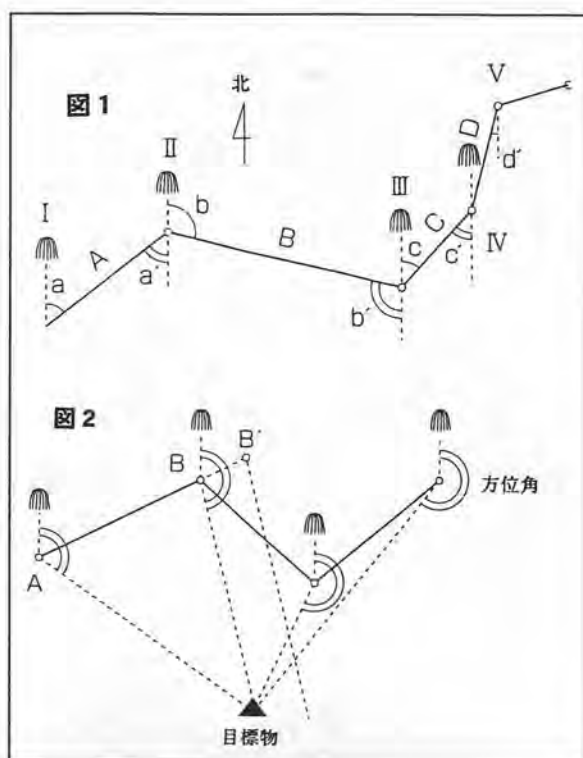


平均をとっている。例えば、直線Aを測る（図1）としよう。梵天一の箇所では正羅針が直線Aの北に対する方角を測り、梵天IIでは副羅針が直線Aの南に対する方角を測った。それぞれの測定値は書き役が梵天持ちの持っている記録表にかきこむ。本来、その二つの数値は同じでなければならない。

測定したデータは、その日の宿舎で野帳に転記するが、正・副のデ

1タに差があるときは、その平均値をとった。測量を手分けする時には、杖先羅針は相当数必要であった。また、直線の方角を測ると同時に、見通しのよい大きな建物や火の見櫓などその他近くの目標を設定し、各折点からもこれら目標物への方位を測り、記録表に記した。これによって後で下図を書いたとき、距離の読み違いなどがあれば発見され、補正が可能になる。直線部の距離と折点の角度を次々に測っていくのを「導線法」といい、上記を「交会法」という。「導線法」と「交会法」が、伊能測量の二本柱である。(図2)参照。

導線法・交会法と合わせて、伊能測量の精度維持に大きな役割を果



たしたのが「横切り法」である。岩場の多い岬の先端などで、正しく測るのが困難なとき、岬の付け根部分に横切りルートを設定して測ることにより、岬の測定誤差がほかに影響しないようにした。また、測量現場近くの目標を「交会法」の確認データとすると、ともに遠くの山々や、島々、岬、半島など見通しのよい不動のものを、遠方交会法の目標にした。

例えば富士山は、各地から観測ができ格好の遠方交会法の目標物であった。この付近では大江山、青葉山、丹後半島、成生岬、冠島、沓島などが遠方交会法の目標物となっている。この遠方交会法は伊能測量を一段と精密なものとした。

地上の測量結果を天文測量によって補正する作業したのは、伊能隊がはじめてであり伊能測量の表看板である。十七年間の測量日数三、七五三日の内一、四〇〇日天測をしている。こうした徹底的な努力の結果、子午線一度の距離を確定し精度の高い日本全図を書き上げることが出来た。

伊能図には、次の四種類の地図がある。

| | | | | |
|----|------------|----|------|---------|
| 大図 | 縮尺 1/36000 | 一里 | 三寸六分 | 214枚仕立て |
| 中図 | 縮尺 1/21600 | 一里 | 六分 | 8枚仕立て |
| 小図 | 縮尺 1/43200 | 一里 | 三分 | 3枚仕立て |

以上が伊能図の基本図である。その他に特別図がある。その特別大図が縮尺 1/12000 で、天橋立図、琵琶湖図など名勝地を画いた地図で、美しく芸術的価値の高いものである。伊能図は今知られていくだけで四四〇種に達する。

幕府に提出された正本はすべて焼失し、副本も関東大震災で焼失する。現在残っている伊能図は、副本、写本、模写本や、下図、試作図などが現存確認されている。

伊能図の特徴 ①

一見、鳥瞰図のように絵画的で美しい。これは素人目にも興味をもたせるためのもので、芸術的にも価値の高いものとなっている。

伊能図の特徴 ②

地図としての使命、精密度が高い。地図名に「沿海実測図」とあるように、海岸線の地形は極めて精度が高いが、内陸部には空白部分が多い。

測線は克明に赤線で表示し、国、郡、村名が記入されている。交合法による測線が朱で鮮やかに書かれ地図を引き立てている。内陸部については、五次以降は幕府の直轄事業となり、比較的細かく書かれている。四国や中国では内陸部でも横切りルートの手法を用いて測量をしているのがよくわかる。又、内陸部において主街道は明確に画かれ、当時の地方の街道もよくわかる。

伊能図の特徴 ③

伊能測量隊の高度な技術であり、天文測量の成果である「緯度線」が記入されていて極めて正確である。「経度」については地図学上の水準に達していなかったために、中部・西国・中国では比較的精度が高いが東北部、九州ではズレている。

丹波・丹後の測量

伊能測量は二度行われている。一度は第五次の文化三年、山陰海岸但馬から丹後の海岸線を若狭・越前・近江のコースで、二度目は第八

次の内陸測量文化十一年姫路で新年を迎え、但馬・丹波へ歩を進める。

第五次は沿海測量と名をうつつように、海岸線が主である。但馬の湯島（城崎温泉）に三泊した測量隊は三原峠を越え丹後入り、久美浜・湊宮、函石、木津、浅茂川、網野、掛津、間人、竹野、宇川、経ヶ崎と丹後半島を回り、伊根浦から天橋立を測り成相寺へ参詣、寺僧から寺の歴史や様子の説明を受けている。成相寺から見る天橋立の眺望に心を動かされたのか、伊能忠敬は地図学者らしく、実測による「天橋立図」（1/12000重要文化財）を画いている。当時も天下の名勝とうたわれ、現在も変わらないこの一文字に続く松並木道は「日本の道百選」の一つに国交省は指定している。

宮津城下に着いた伊能測量隊は、宮津で日中に太陽観測で南中高度を測り、天測のデータを次のように残している。

丹後宮津（魚屋町）極高35度32分 経度31度5分

從東都（東海道・自龜山歴松山）

測量隊は宮津より栗田、由良、田辺（舞鶴）へと海岸線を究め、大浦半島を廻り若狭へ測歩を進める。九月一七日若狭国・日引村に着き、二〇日に亘る丹後の測量を終わる。「この日田辺藩家中、内海李、古川半弥という者、吉平について、我等に曆学並びに地理を行く行く学ばん事を願う」と測量日記に記載されている。

第八次測量は、文化八年十一月二五日に江戸を出発するが、その一〇日前の一十一月五日の「江戸日記」に次の記録がある。「晴天、風。高橋（天文方・景保）より地図上納。牧野豊前守内、合田祐唯、高橋幸助入門、下河辺（政五郎）に引合す」と、田辺藩からの入門者があった。この辺りの事情調査は今後の研究課題としたい。

九州測量を終えたが、片腕とも頼む坂部貞兵衛を失った忠敬は大きな精神的な打撃を受けながらも中国、山陽の内陸部の測量を終え、文化一一年の新年を姫路で迎え、播州、但馬、丹波へと測量の歩を進める。二手に分け播但街道と丹波街道を測り和田山で合流。更に但馬路を測り、再び二手に分け出石城下を出立。伊能忠敬の本隊は、出合村（現・但東町）で別手と分れ京街道を上る。丹・但の国境登尾峠を越え、天田郡へ上佐々木、野花、牧へ。荒河村では、福知山・宮津の追分となり宮津街道を上天津、下天津を経て丹波・丹後国境まで測り、丹後方面の別手に繋ぐために杭をいれる。

一月二十八日、春まだ浅い荒河村の追分を福知山街道へ。下荒河・和久市、鑄物師町、寺町丹後口木戸、（左に久昌寺、西蓮寺、法鷲寺）紺屋町横町三叉路、菱屋町（左に常照寺）広小路下柳町、呉服町、京町、京口門板橋、堀村地内堀端に㊦印を残し市中限打止め。引返し市中裏町通り京町、鍛冶町、上紺屋町、下紺屋町、菱町等福知山三万二千石の城下町の市中を測る。翌二十九日小雨降る中を、堀端の繋ぎ杭より蛇ヶ端、土師村・竹田川端（現・土師川）、京街道追分に㊦杭を別手に繋ぐために残し、高畑、森垣、水内河原、岩間村宇峠、塩津峠、氷上郡下竹田村・柏原、篠山城下へと測歩を進める。

一方、丹後方面の別手は、永井甚左衛門を頭に六名は雪深い丹後路・熊野郡へ入る。「踏堅めたる雪三尺斗、谷間は五、六尺、寒中は二丈も積もるといふ」と日記に記している。久美浜へ出て八年前に測った寅年の杭を確認し佐野村、野中村、比治山峠を越え、中郡鱒留村、峰山城下を測る。それより竹野道（現、弥栄町）を通り海辺へ出て竹野村イモチ浜から屏風岩の大絶壁を測り、寅年の測所へ繋ぐ。再び峰山へ引き返し周枳村、口大野村、三坂村から與謝郡大内峠へ出て天橋

立の絶景を賞賛し、岩滝村へ続いて、寅年の測点に繋ぎ宮津城下を再度測る。普甲峠を越えて河守町、由良川左岸、丹波との国境に本隊が残す杭まで測る。関まで引き返し三ヶ村で右岸へ渡り桑飼上、下両村、志高村、久田美村、上東村、上福井村、下福井村、田辺城下に着く。これより京街道、山際に並び建つ寺院を結びつけるように町並み、引土番所を市中限とし高野川に架かる京橋を渡れば松縄手、京田の一里塚を左手に真倉村、黒谷村、梅迫村、安国寺へ。この間が現在の国道27号線の道筋である。当時の松縄手や一里塚のある風景が浮かぶ。横峠を越え山家村、和知川を舟で渡る。船井郡広野村立木、京街道草尾峠から妙楽寺村、栗野村、橋爪村宇松山に着く。

松山は交通の要衝で、鉄道・山陰線の開通に伴い鉄道沿線から遠ざかったが、上り京街道、下り山陰道の9号線と、綾部道・篠山道の173号線との交点である。伊能測量隊もこの地点を内陸測量のキーポイントに位置付けている。松山を福知山へ向け発ち、大朴村、大久保村、天田郡免原中村の細野峠へ。免原下、千束、生野の里、岩崎、長田の村々を経て土師村に着く。先に大阪街道へ向かった本隊の残す㊦杭を繋ぐ。土師川の川幅を六十五間五尺と測っている。現在の土師橋付近である。土師村の駅場を綾部道へ、綾部から須地山峠を越え大原村、大原神社参詣の道を「大原詣し」と言つてにぎわった道である。再び松山へ出て更に須知・園部・京街道と伊能測量隊は進み、先に福知山より篠山、摂丹方面を廻った本隊と京都で合流し南丹波、山城を測り江戸へ向かう。

丹後の道・丹波の道・歴史の道

但馬から雪深い円城寺峠を越え、丹後入りした。ここは熊野郡河上

谷川の上流である。この流域には十五基の古墳があり、その中の「湯船坂2号墳」からは玉を噛む大小二対の竜を表現した「金胴製・双竜環頭太刀」の出土をみる。又、この地には「古事記」開化天皇の項に、四道將軍の一人丹波道比古主命は、丹波の河上・真須の郎女を娶り、娘・比婆須比売を垂仁天皇に嫁している。

福田川流域は、赤坂今井遺跡をはじめ大將軍遺跡外三ヶ所の大遺跡がある。中でも日本海側最大の古墳「網野銚子山古墳」は庄巻である。

竹野川流域には、二十件もの遺跡がある。中でも際立って日本海文化を彩る碧玉水晶の加工、鍛冶・製鉄、網野銚子山古墳に次ぐ竹野神明山古墳等々は、さながら古代丹波王国を彷彿させるものがある。

天橋立を見下ろす「大風呂1号墳」は野田川流域に位置し、豪華な「青いガラスの釧」の出土をみている。その上流は加悦谷・丹波福知山に通じる古代歴史の道である。

これらの流域は伊能忠敬が第五次・第八次の二度に亘り測っている。結論的に言うなれば、伊能忠敬及び伊能測量隊は古代遺跡を意識したわけではないが、そこに「道」があった。その道は古代からの道であり、近世も現代も人類が生きる道であり、文化と歴史の行き交うかけがえのない道である。

日本海に注ぐ「母なる河」、太古より由良川流域に人類生存の足跡が残る志高、桑飼（舞鶴）、三河宮ノ下（大江）、興・観音寺、広峰（福知山）、私市、青野（綾部）と縄文から古墳に亘る各時代の遺跡が知られている。由良川とその支流土師川の両岸には早くから「道」が拓けていた。伊能忠敬はこの河川流域を審さに測量し、測量日記には由良川に関する次のような記録を残している。『二月八日（文化十一年）朝

霧深し、四ツ半頃晴れ一略一宇三ヶ村（現大江町）、大川、船渡し六十間、此名三つあり大川、由良川、大雲川という。川上は丹波国水戸村より流、此より十四里、舟通用は上、大島まで五里、川下由良湊迄五里』。又、『二月十二日（文化十一年）昨夜より雨終日、丹波国何鹿郡谷大学頭在所山中町出立。同所止宿前より初、坂町神林川肥後橋十五間一略一和知川（現由良川）舟渡三十間、川上桑田郡佐佐里より流、之より十三里、川下由良湊迄十四里。即、此処にて神林川、和知川落合なり。一略一』。このように由良川に関する情報をかなり委しく入手していることは流域と道路との関わりが深いものとの認識があったと考えられ、地図を仕立てる上にも重要な手がかりとなったものと考えられる。

丹後は子供の夢を育てた日本昔話の宝庫である。浦島太郎、羽衣伝説、さんしろう太夫、大江山鬼伝説。これらの話は由良川を遡り都へ、都で洗練され、都から全国に伝わる生活と文化の道があった。

さんしろう太夫のむごい仕打ちを受けた津志王は、和江国分寺の聖に助けられ皮籠に入れられ追っ手を逃れる。「丹後の国を立ち出でて、いばら（菟原）ほうみ（大身）はこれとかや、鎌谷、みじりを、うち過ぎて、くない、くわはこれとかや、くちこぼれんも聞こえたる、花に浮き木の亀山や、年は寄らぬと思いの山……」を越え都へと逃れる。その道すがらの一つ細野峠・十七余町を説教師たちが詠んでいる。

江戸時代の儒者貝原益軒は「西北紀行」に「ほうその嶺一だいなる坂にて、さかし」と記している。伊能忠敬もこの細野峠を文化十一年二月十五日に測って測量日記に特記している。全国歴史の道百選「細野峠」は国道9号沿いに健在である。


いま、京都縦貫道の建設工事が宮津へむけて急がれている。安国寺の国道27号線上では鉄道、国道を跨ぐ工事が最新の技術と工法で進捗している。かつての京街道は安国寺から横峠を越え山家へ、和知川（由良川）を渡り、広野立木（和知町）より草尾峠を越えて桧山に至る道であったが、明治37年11月3日に鉄道舞鶴線、明治43年8月25日鉄道山陰線の京都までの開通をみてからは、この京街道に人影を見ることが少なくなり、けもの道と化していたが、この付近が京都縦貫道の路線通過位置となつて工事が進められている。

天橋立くつきり

伊能の大図

200年前の宮津描く

忠敬も見たかった「炎の架け橋」



江戸時代末期の宮津の地図。伊能忠敬の大図（1806）に描かれた宮津の風景。天橋立の架け橋（炎の架け橋）が描かれている。この地図は、伊能忠敬が宮津を訪れた際に描かれたものである。地図には、宮津の町並み、川、そして天橋立の架け橋が描かれている。この架け橋は、江戸時代末期に建てられたもので、現在でも残っている。伊能忠敬は、この架け橋を見て、その雄偉さに感銘を受けたとされている。

京都新聞=2001. 7. 21

十年程前に「高速道路の古代回帰」という事を聞いた覚えがある。今私たちの目の前に山が開かれ巨大な道路が出現しようとしている。一九〇年前、伊能測量隊が一步一步、大地を踏みしめ、川を渡り、峠を上り詰めた京街道が、よみがえりつつある。

国土交通省平成14年度「道路ふれあい月間」歴史講演会より

（舞鶴市・舞鶴地方史研究会長）

小林清さんが丹後・丹波地方の足跡紹介

福知山市の京都創成大学で「道の日」の八月十日、伊能忠敬が江戸時代後期に丹後、丹波地方に残した足跡を紹介する講演会や、旅装と食べ物から街道を歩いた昔の旅の様子をしのぶ催しがあった。講演では約110人を前に、会員で舞鶴地方史研究会長の小林清さんが、1806年と1814年に伊能忠敬が但馬、丹後、丹波地方を測量した際の経路と現在の道路網や地形との関連を説明した。

2002年(平成14年)8月11日 日曜日 10版
京

伊能忠敬 丹後・丹波地方の足跡紹介



股引、わらじ、測量器具

展示や講演 昔の旅姿しのぶ

福知山で 展示や講演 昔の旅姿しのぶ

福知山で、伊能忠敬が江戸時代後期に丹後、丹波地方に残した足跡を紹介する講演会や、旅装と食べ物から街道を歩いた昔の旅の様子をしのぶ催しがあった。講演では約110人を前に、会員で舞鶴地方史研究会長の小林清さんが、1806年と1814年に伊能忠敬が但馬、丹後、丹波地方を測量した際の経路と現在の道路網や地形との関連を説明した。

朝日新聞・京都版 2002. 8. 11

伊能忠敬と橋津（1806～1814）

田中 精夫

西蓮寺の改修

橋津藩倉跡の裏山裾に西蓮寺という古刹がある。慶長十八年（1613）創立の浄土宗知恩院派の寺院である。享保年間（1716～1736）に建立された本堂の天井に、一つの墨書がある。「為先祖菩提之 安永二巳星六月廿二日 施主久世屋太兵衛」と「施主天野屋重兵衛 安永三年歳八月・・」。この銘は、安永二～三年（1773～1774）に二人の施主により本堂の改修工事が行われたことを表している。

天野屋与兵衛と久世屋太兵衛（文化三年）

久世屋（戸崎家）、天野屋（中原家）の二家は「伊能忠敬測量日記」に記されている。文化三年八月十三日（1806・9・23）伊能隊の一番隊（高橋、平山、佐藤、惣兵衛）が赤崎から湊村（橋津）に到着した。一番隊は、赤崎の松ヶ谷から菊里、大塚、由良、西園まで測量し、橋津に到着した。宿舎は、久世屋太兵衛宅である。翌九月二十四日、隊員は晴天の中、橋津から宇野、宇谷、園を経由して泊まで測量し、橋津に引き返し伊能忠敬らと合流した。

九月二十三日に赤崎にいた伊能忠敬は、九月二十四日坂部、稻生、門倉、永沢と共に橋津に直行した。西園から橋津までの測量は、下河辺らが担当し、全員が橋津に宿泊した。宿舎は、伊能忠敬らが天野屋



天野屋宅（中原家）



橋津藩倉（古御蔵）

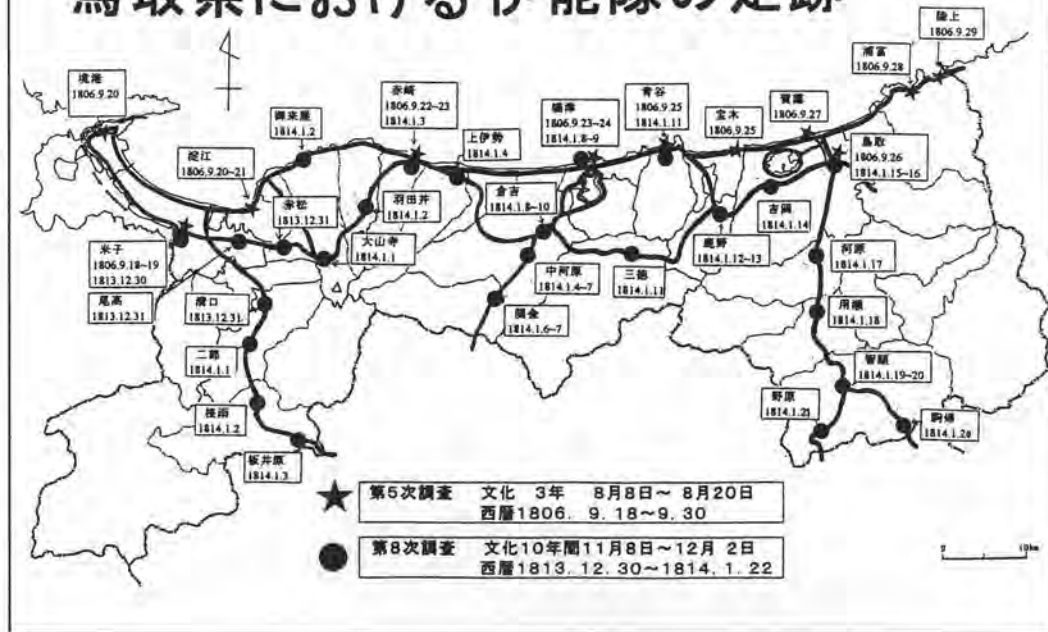


橋津集落



橋津川と橋津

鳥取県における伊能隊の足跡



与兵衛宅、その他の隊員が久世屋太兵衛宅であった。翌九月二十五日、薄曇りの中、伊能隊は、青谷を目指して出発した。

伊能隊の宿泊地となった天野屋与兵衛と久世屋太兵衛両名は、西蓮寺修理に表れた両家の面々である。久世屋太兵衛は同一人物と見られるが、天野屋与兵衛は、重兵衛の子孫と見られる。

伊能隊の鳥取測量

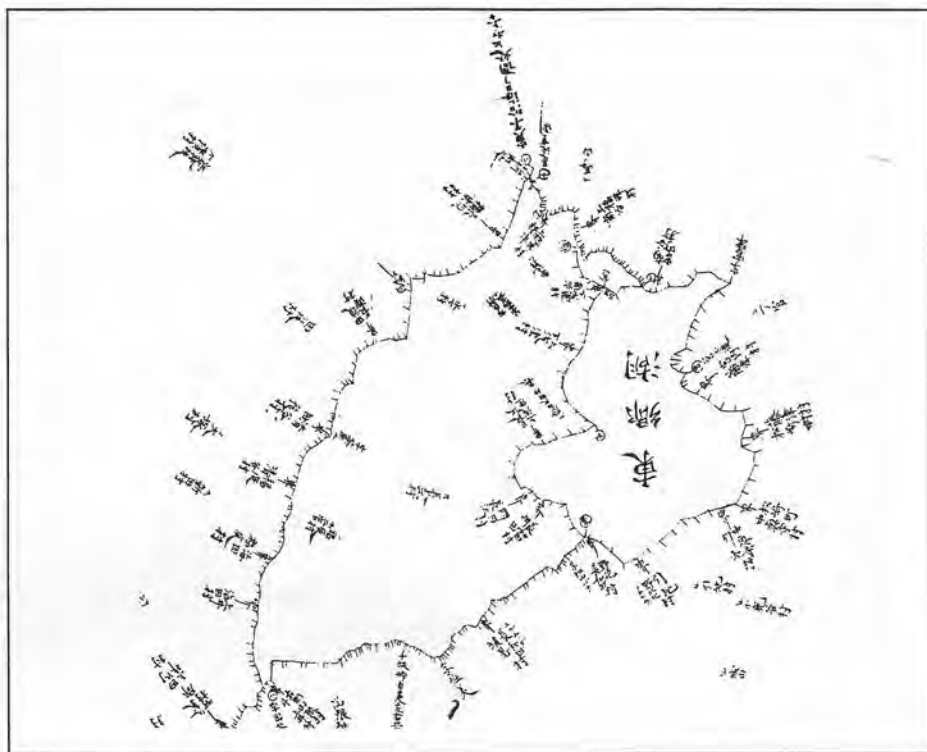
伊能忠敬は、文化三年と文化十年の二度、鳥取県を測量している。

文化三年の第五次調査は紀州と中国沿岸の測量が目的であった。また、文化十年の第八次調査は、九州、中国・中部内陸部の測量が目的であった。

文化三年には隊員二十名、鳥取県に十三日間滞在。米子へ境港へ由良く橋津く鳥取く浦富く浜坂の海沿いのコースをたどった。米子城下の測量を役人が断るなど無礼な応対があったり、忠敬は病氣療養中であったり、台風と見られる悪天候があったりと苦労したが鳥取城下では、藩主から贈り物を受け歓待された。

文化十年には隊員十九名、二十四日の滞在。米子で鳥取方面と津山方面の二隊に別れ、忠敬の隊は、大山く倉吉く三徳山く鳥取く智頭く津山と内陸部・山間地のコースをたどった。途中、大山寺、三徳山、宇部神社など著名な神社仏閣を訪ねた。

記録には、面会者の名前や天体測量の記事が多数書かれた。青谷町の石井世左衛門の記録を見ると、伊能忠敬が面会者に親切に対応しており、余裕が感じられる調査であった。



東郷湖測量(文化十年)

文化十年閏十一月十八日(1813・1・8)伊能隊は、再び天野屋、久世屋に宿泊した。宿泊したのは高橋善助らである。善助は、高橋至時の次男。この日、伊能は、倉吉市倉吉の山形屋宅に宿泊した。今回の測量は、鳥取県の内陸部の測量が目的であった。一隊は米子から日野街道へ、本隊は大山から倉吉、三徳山、鹿野、鳥取、智頭を経由し津山へ至る内陸部の測量を行った。伊能は、倉吉市中河原に三泊、倉吉市街地に三泊し、荒尾氏、久米郡大庄屋、宗旨庄屋、町年寄、町庄屋など多くの面会を受けた。この間に測量隊は、南は関金く犬狹峠く下長田に至る美作国境まで、北は、東郷湖一周の測量を行った。

東郷湖の測量は、一月八日く十日までの三日間であった。文化三年の時、湖山池を一日で測量を終えているのと比較すると異例の長さである。冬季期間中の測量であり、苦労したこと。あるいは東郷湖を重要視していた証拠とも考えられる。

測量は、一月八日、長和田と門田間の東郷湖端から開始された。門田く長江く上浅津。ここで乗船して湊村(橋津)で泊。宿泊先は、天野屋と久世屋。翌一月九日、橋津から上橋津く南谷く上浅津。続いて、南谷く宮内と測り、もう一度橋津に泊。宿泊先は、天野屋と久世屋。一月十日、宮内く藤津く松崎く引地く野花く長和田と測り、東郷湖の測量を終え、橋津く久留く田後く上井と測り倉吉往来と山陰道を繋げた。この三日間、天候は曇り時々小雪または雨と悪天候であった。十日、東郷湖の測量を終えた一行は、倉吉の山形兵三郎と遠藤善五郎宅に宿泊した。東郷湖の測量終結を大いに祝ったであろう。翌一月十一日、忠敬は、三徳山に向かう途中、わざわざ、橋津の天野屋に立ち寄

り、昼休みを取った。この度の測量で忠敬は、三日間とも測量を部下に任せ倉吉に逗留していたと考えられ、忠敬は、天野屋与兵衛と久世屋太兵衛に文化三年の測量と、東郷湖測量のお礼を述べたことと推察される。

東郷湖の緻密な実測図（下絵図）が残されているのでそれをご覧いただきたい。地形の突出部、入り込み部を、要領よく実測し、シャープな図となっている。現在の地形図と比較しても遜色のない見事な出来映えである。

伊能隊との出会い

二回の調査で伊能隊は橋津に合計四泊している。鳥取での四泊、米子での三泊、倉吉での三泊と比べても多い。この多さの原因は一体何だろうか。

それは、橋津の隆盛に関係しているものと考えられる。当時、橋津は、鳥取池田氏の灘御蔵として隆盛を極めていた。橋津藩倉の興隆期は、江戸時代後期であった。橋津藩倉の始まりは江戸時代初めの寛永年間とされる。天保十五年（1844）の頃の敷地面積は、八、六七七㎡。文化五年の御蔵絵図によると十五棟の建物が建っていた。寛政五年の納米額は約一七、六六五石（44、164俵）であった。七代天野屋与兵衛は、二百石積み船を二艘作り航海業を創業し、大成功を収めていた。

伊能隊が訪れたのは、橋津藩倉の絶頂期であった。自身も豪商であった忠敬は、橋津を訪れ、その股眼に目を見張り、橋津や倉吉で情報を収集したことが考えられる。鳥取池田氏の特産物の状況、蔵米や物資の輸送方法、物価の状況など商人ならではの意見交換がなされたの

ではなかろうか。忠敬には、鳥取池田氏の商業・産業の中心地、橋津に特別の感慨があったのではなかろうか。

（鳥取県佐治村・鳥取大学教育地域科学部付属小学校）

参考文献

- ★東京書籍 『目で見る伊能忠敬測量隊』
- ★浅川滋男 『橋津の藩倉』
- 奈良国立文化財研究所
- ★渡辺一郎 『忠敬と伊能図』 1996・2・1
- 伊能忠敬研究会
- ★佐久間達夫 『伊能忠敬の伯耆・因幡国の測量』 1998・9・25
- 2000・7・10
- ★千葉県 『伊能忠敬測量日記一』
- ★佐久間達夫 『伊能忠敬測量日記第五巻』



1:50000「青谷」「倉吉」<国土地理院>平成6年

岩城島の文書

伊藤 栄子

愛媛県岩城島に伝存する文書を、以前に、本会会員の菅哲彦氏から送って頂いた。これらは菅氏が自ら島へ出向いて、写しをとって来られたものである。伊能測量に関する文書はこの他にもあるが、既に村誌に掲載されていて、この島での測量の一端をうかがい知ることができ。過日、赤徳坂越浦の測量記録を読んで間もない私には、この未掲載の文書にも興味があった。



五月のある日、岩城村教育委員会の林先生に連絡をとり、未公開の文書を見せて頂くことになった。広島県福山から因島土生港までは、日に数回高速バスが通っている。むかし忠敬の測量隊が、何日もかかって進んだ海の遭も、約一時間で土生につく。中世から水軍の根拠地であった因島は、いまは町の中に水軍城が建てられていて、観光の呼び物になっている。ここから岩城島まで、今治市営の船に乗る。島は人影もまばらな静かな漁村であった。

先ず岩城村誌に目を通してみると、文化二年丑二月廿四日の老中触が出てくるが、これは第五次測量出立に先立って街道筋の宿村々へ出された老中よりの触書である。

これに対し、次に掲げるような伏見から行先を変更したため出された先触が記録されている。発信元は測量隊の主な面々となっている。

村井小左衛門より参ル書付（下弓削村大庄屋からの廻状）

御証文

- 一、人足七人
- 一、馬六疋
- 一、長持老棹持人足

右は我々国々海辺為測量御用、来ル晦日内弟子とも上下拾五人伏見出立、下辺表より測量相初メ神崎川通り尼ヶ崎江向、夫より摂州、播州、備前、備中、備後、安芸国廣島迄右国々井瀬戸内島々迄不残相測候間、御証文之通り人馬無滞継立可被申候。尤瀬戸内之島々江は渡り勝手宜所より案内致シ、船用意可有之候。

且ツ讃州、予州杯之島々ニ而も中国筋島続ニ而測量都合宜所共此度相測候間、其最寄より讃州、予州へ之島々へ兼而申通し置、渡船其外止宿差支無之様通行筋山川とも測量致し候間、村々案内可有之候。

一、泊り宿之義は雨天其外逗留之義も有之候間、途中より追々可相達候 尤御用測量器振込候間明キ地十坪之地所用意可有之候 泊り宿二而夜分致測量候間、可成丈上下不殘同宿之積り用意可有之候 村方建家間狭二而は同宿難相成義二候間、近辺別宿用意可有之且支度等は御定之木錢米代相払候間、其所有合之品二而一汁一菜之外馳走ケ間敷儀は決而可為無用候 則御証文四通差遣候間、此先触早々致順達芸州廣島留置、我等着之節可被返候 勿論廣島より先々之義は同所より先触差出可申候 以上

丑九月廿九日

下河辺政五郎

坂部貞兵衛

高橋善助

伊能勘解由

伏見より鳥養下村より神崎川通、摂州尼ヶ崎、夫より播州、備前、備中、備後、安芸、廣島迄

右国々海辺村々島々問屋年寄組頭中

伊能隊は琵琶湖周辺の測量を終えた頃、寒気に向つて北国道から山陰へ進まず、伏見より南下して山陽道を通ることになった変更の触書である。これによつて通路に当たる村々、宿次の当事者は少からず慌てたことであろう。初めの予定では一年位先に測量隊を迎える筈であった。変更の触書の写しは岡山御本陣の田原屋与右衛門から備後尾道迄、村継によつて廻された。廻状は多くの場合刻付をつけ、十ヶ村またはそれ以上の単位で回送され、必ず発信元へ返される。上記の触書の場合は触を出した測量隊が移動を続けているため、我等着之節可被相返候」つまり自分達がその土地へ行った時に返せばよいといっている。山陽道の場合測量の範囲は沿岸の島々も含まれるから、結構時間

もかかった。この廻状が今治領、下弓削村大庄屋の村井小左衛門から岩城村庄屋白石友右衛門へ届いたのは十一月十四日であった。早速翌日、大庄屋の菅周三郎へ知らせている。しかし廻状が島々を回っているうちに、山陽道をまっすぐ進んだ触次の方が早かつたらしく、大庄屋から折返し通知があつた。

こちらでも忠海から書類が届いているが、当方も多用で写しを取ることもできない。そこから写し人を一人当方へ差出して其方の分を写し取らせるように。とのことで急に多忙となつたことが伝わってくる。その上追伸によれば、写し取る書類は三十枚余もあつて、外に、備前片上にあつた絵図についてもふれている。片上の絵図は大変測量御役人の御気に入りだつたので是非入手したい。これをうけて友右衛門も奔走する。

赤穂の前に測量した室津では忠敬先生は絵図面のことで、大変御機嫌が悪かつた。こうした事がいち早く伝わっているのか、絵図のことでは皆ビリビリして神経を使っているように思える。岩城村の庄屋友右衛門は早速人を尾道へ遣している。しかし尾道でも所々へ貸していて戻らない。やつと写し取り帰村したのが十二月朔日であつた。村々でも競つて書類を写し回していたのである。

各村で写した書類の経緯が、村誌に掲載されていない左の文書でわかつた。

公儀天文測量御役人様御順国諸仕構并備前片上、

赤穂御領坂越浦為外聞罷越聞書写共

丑十月

右備前岡山并片上駅迄罷越承り合之所、尾道町筆役文蔵儀も同様罷越候二付申談、片上駅名主門兵衛より供々承り合候趣如此御座候

尾道役所は筆役文蔵を片上駅へ遣して、三十数枚の書類を写しとらせた。岩城村所蔵の文化二年丑十月の文書は凡そ三十六枚あつて数は一致する。これには赤穂の湯浅四郎左衛門が細かに記して片上へ送つた文書の外に、向島西村庄屋の理兵衛と後地村組頭の武兵衛が、絵図の取り方を片上名主門兵衛から聞いて記したのも加えてある。

この中の四郎左衛門の手紙の末尾に、「片上伯父江も早々御通達可被下候」とあるので、門兵衛とは昵懇の間柄にみえる。また絵図面の仕様は、所々にて磁石を以つて方角を定め、山と里、道すじを形に調えて仕上げてゐる。そこで片上では絵図師を頼んで丁寧に仕立てたという。測量御役人の御氣に入りの絵図は凡そこうして作成されたことが分る。これらの情報等も書き加えて、筆役文蔵は十月のうちに尾道へ戻つてゐた。

原文書は膨大なため改めて紹介したい。その一部は左のとおり。



* 尾道町筆役文蔵の名がみえる

岩城島とその近辺

広島県と愛媛県の間瀬戸内は非常に島が多い。岩城島は芸予諸島のほぼ中央にあたる。領域は愛媛県の東北端にあたり、隣りの因島は広島県である。岩城島の開発の歴史は古く中世は漁業の外、製塩の島として知られていた。近世は松山藩に属して、本陣が設けられ、参勤交代のおり藩主が宿泊したり、西廻り航路の要地として賑つた。現在も本陣屋敷をはじめ、古い家並が残つていゝというが、今は静かな漁村となつてゐる。

瀬戸内しまなみ海道が芸予諸島の島々を巨大な呂り橋で結び、尾道大橋から向島、因島、生口島、大三島などを通り四国の今治まで伸びてからは岩城島はとり残された形となつた。岩城島へは因島の土生港から連絡船で三十分足らずで到着する。因島は中世以来名高い村上水軍の本拠地であつた。村上氏は毛利氏と陶氏が戦つた厳島の合戦で毛利軍に加勢して勝利をもたらした。その後村上氏は周防へ移つたが彼らが自由に船を操作し、勝手知つたる瀬戸内海を航行する技術は、この辺りの島々では当然ながら生活の中で受けつがれてきたわけで、尾道の筆役文蔵も海路で片上までを往復した。海路は陸路よりも遥かに早く輸送力も優れていたのである。

明けて文化三年寅正月七日、向島西村庄屋の理兵衛が備前下津井村を尋ね、測量済後の仕様内容を書き記したのが後記の文書である。向島西村は向島の西北部にあり、尾道市に接している。安芸(広島県)の向島から備前(岡山県)の下津井へ出かけ、名主義四郎に会つた上で写してきたものである。下津井湊は海上前方の櫃石島(ヒツシマ)によつて風波を遮断され、天然の良港として栄えてきた。風待ち、潮待ちの爲め、参勤交替の諸大名に始まり、北前船から朝鮮通信使などがこゝで

休憩をし、給水をうけた。近世は金毘羅詣での往來の終点として、瀬戸内航路の要所として賑わった。その昔の大井戸跡や古い遊廓の建物が今でも一部残っているという。

櫃石島は塩飽諸島の一島であり、塩飽諸島もまた中世は塩飽水軍、近世は塩飽廻船で名を馳せた所である。下津井村では既に前年丑十一月二十一、二日と測量は済んでいた。伊能隊は向島西村へは二月七日、岩城島へは二月十四日に夫々止宿していたから、測量を目前にして更に情報があつたものと思われる。この文書は12枚ほどで主に加子や人足、手伝いの人数、役船の種類や数、宿賄の費用等が記されている。雇いの人数、賄費、船の数等は受入れる側にとつて、最も気になることであろう。村誌にも断片的な資料は多く掲載されていたが、前記赤穂の聞き書きと共にまとまった資料といえよう。

岩城村の文書（下津井村にて）

文化三年

公儀天文方測量御役人様御巡国ニ付、去霜月備前児島郡下津井村諸仕構御用済跡聞書

寅正月

御調郡控

一、寅正月七日 備前御領児島郡下津井村へ罷越シ申候 名主義四郎

江応対仕候処、御役人様方同所霜月廿一日、廿二日御止宿被為遊、

御用済之跡承り合候趣左ニ奉申上候

一、御泊、釘拔御紋付御灯燈式張、御船印御幕御領分御持送相成候

一、大庄屋組切附添

一、絵図面之義、継合宜候ハ、組合内老枚式枚三枚二而も宜敷趣ニ御座候処、児島郡之儀は村毎相調、一郡継絵図ニ相成候事

一、道筋海辺通路難成場所御手分ニ而、老手ハ道老手ハ磯辺船ニ而御通り之儀も御座候 然は御案内差問不申様、判頭五六人股引羽織ニ而相勤メ申候

一、夜分不寝番仕候事

一、天文及深更申候故、御夜食指出シ申候

一、暁朝一汁三菜、昼ハ右ニ准ジ手輕キ料理仕候事

一、御国御移り日、御代官太田弥助様御出張御挨拶被遊候

一、御領分中御附廻り小頭老人御差出し

一、御昼浦々途中ニ而御上り被成候儀も有之由、御台所船御手分之場所へ方角隔り候程難計、式艘用意仕候事

但測量被成候節、格別大キ成船ニ而は御不順廻ニ相聞申候

一、御召替共浦船御幕船三艘、御道具船は御印計出候事

一、御郡代様御通り之節、道掃除繕浜辺杯能掃除仕候事

福山着ハ安藏宅

一、御本陣 入亭主 吹上村 和助

御上下拾五人

内

式人 老問

世話焼 宗吉

中七人 式問

恵三郎

下六人 老問

通ひ子六人

喜平子

熊吉

藤兵衛子

熊藏

賢次郎子

由松

源三郎孫

道助子

伊勢松

半五郎子

三之助

梶方

喜平

十九吉

御茶方

下津井村 長八

吹上 十吉

彦兵衛

内夫七人 数右衛門 助五郎 嘉吉 善助

紋次郎 岩藏 善助

一、御床

御証文台 白木三宝郡中持送り

御焚斗 ぬり三宝ニても有合

持送り 新敷分用意

一、御刀掛

三ツ

一、御煙草盆

御上分式ツ 御中下ハ人数見合用意

一、御茶道具

一切

一、路次口

御印附行燈式張持送り 盛砂

一、御上御湯殿

入湯桶 女良板 湯桶 水桶 ひしやく

浴衣式ツ 風呂鋪 湯手拭

一、御手水場

御上中下三ヶ所

御手拭 晒木綿

一、中湯殿

浴衣式ツ 湯手拭

一、下湯殿

浴衣老ツ 湯手拭

一、膳碗

御上中通イ迄、宗輪（和）人数九人

*宗和（茶人金森宗和）の好みによる黒又は朱塗りの膳

一、同

御次六人黒宗輪（和）

一、御夜食之節入用

膳 吸物椀 奈良茶椀（蓋つきの茶椀）

右何れも拾五人前、上中下前二准ジ 上中下

一、菓子盆

三枚

一、燭台

四ツ

一、手燭

四ツ

一、丸行燈

七ツ

一、置火燵

四ツ

右蒲団御上分絹、御中下木綿新敷分 但し御上中御四人ハ御所持

之由ニ御座候

一、四布蒲団 拾枚計

一、御付廻り小頭中 上下式人 宿老軒

一、大庄屋并郡中附送り名主三人御案内、福田新田加一兵衛共

上下拾老人 宿老軒

一、凡伝持拾式人 但老郡付廻り

御手伝人共宿老軒

右三軒之内夫小遣夜具共用意、賄方有合之品ニ而一汁一菜酒無用

*ここで御上分式ツというのは、忠敬と高橋善助の二人であらう。善助は當時副隊長格で参加し、徳山でも宿は同室であった。

*酒無用というのは、全く酒を嗜まない忠敬の意向であつて、下部の者達には大へん気の毒。

は大へん気の毒。

御用船手当

三拾石積 *加子（かこ・水夫のこと）

一、御乗船式艘 四人加子 又蔵

右同断 喜三郎

一、御次乗船老艘 四人加子 甚三郎

一、漕船三艘 但小漁船三人加子 下津井村

一、凡伝持船拾艘 右同断 呼松受

御手分之節ハ臨時外船用意

一、くさり縄持船式艘 但小漁船三人加子 下津井村

一、右手伝乗船式艘 右同断 同

一、通ひ船式艘 右同断 同

三拾石積

一、御荷物船式艘

四人加子

仁右衛門

上乘判頭老人

五兵衛

一、御案内船老艘

小漁船三人加子

呼松(呼松村)

式拾石積屋形付

一、御小頭中乗船老艘

三人加子

忠四郎

一、大庄屋乗船老艘

三人加子

權藏

一、村役人乗船老艘

但小漁船 三人加子

呼松

三拾石積屋形付

一、御台所船老艘

三人加子

平吉

一、漕船老艘

小漁船三人加子

呼松

一、御通ひ船老艘

同

同

三拾老艘 内

三拾石位 六艘

下津井村

式拾石位 式艘

同

小漁船 九艘

同

同 十四艘

呼松

一、御乗船中乗御乗方共請持

新田佐吉

一、船中御通子

同新藏

吹松(呼カ)孫平

一、小漁船才判人式人

下津井 岩吉

一、薄縁新式拾三枚 内 拾五枚御乗船三艘五枚ツ、四枚通ひ船式

枚ツ、式艘、四枚くさり持船式艘式枚ツ、

三郎平

一、火之廻り判頭式人

外二人足四人 昼夜ル相廻り可申候事

一、御道員勤番判頭式人

外二指心得候人足式人相添相勤メ候事

一、御道員持人足五拾人

下津井より差出候事 外二引廻し判頭老人

一、味野迄御荷物送り夫

五拾人

式拾人

吹上村

式拾人

赤崎村

拾人

菰池村

引廻し判頭

赤崎判頭 新左衛門

吹上判頭

新五郎

菰池判頭

利八郎

霜月廿一日より廿二日

一、三百八もん

御上御四人様、御次拾老人御昼木代

一、五百拾文

白米七升七合

一、六百五十四もん

御上御四人様、御次方拾老人様御泊木代

一、老貫式拾もん

白米老斗五升

式貫四百九拾式文

右御通行ニ付御止宿被仰付、紙面之通木代米代被下置健奉請取候

尤一汁一菜之外御馳走ケ間鋪義、決而無御座御非分之儀毛頭無御

座候 以上

備前国児島郡下津井村

十一月廿三日

名主 義四郎印

一、三貫六百拾文 内式貫四百九拾式文 木代米代二頂載(戴)

差引老貫百拾八文 此銀札拾五五分四厘 但し老斗二付百六かへ

右之通過銀札奉指上候 以上

霜月廿三日

下津井村名主 義四郎

御同国領同国同郡

下津井村

一、高百八拾四石七升

一、村長

一、町長

一、家数 六百拾三軒

村分

一、家数 四拾八軒

町分

一、人別 貳千七百五拾六人 内 男千四百九拾老人

女千貳百六拾五人

一、人別 百九拾四人

内 男九拾六人

女九拾八人

一、宮二社 京都吉田殿御支配

長浜明神

小社二社

四社明神

右同断 祇園宮

八社明神

一、寺老ヶ寺

真言宗京都御室御所御末 円福寺

一、古城山 老ヶ所

城主 池田河内

一、御在番

一、船番所 老ヶ所

一、燈籠堂 老ヶ所

一、西波戸 長貳拾貳間 後

一、古波戸 長貳拾八間 前

一、新波戸 長三拾貳間

一、島 八ツ 内

釜 島 周廻貳拾四丁

見渡し貳拾四丁

松 島 周廻り九町十七間

見渡し十四丁貳拾間

六口島 周廻り四拾七丁七間

見渡し拾八丁三十間

上濃地島 周廻り五丁貳間

見渡し貳拾五丁

下濃地島 周廻り七丁七間

見渡し貳拾老丁

細濃地島 周廻り六丁六間

見渡し三十五丁

イサロ濃地島 周廻り四丁四間

見渡し六十九丁

上水島 周廻り十七丁十六間

見渡し六十九丁

杓 島 周廻り老丁五拾八間 見渡し八十四丁
浜 べ 三十三丁拾老間 往来十七丁四十三間半

但此書上ヶ大庄屋一組限り老冊相成候二付、村毎御宛等無御座村役人連名仕、伊能勘解由様ニ仕差上申候

右之通ニ御座候 以上

向島西村庄屋 理兵衛

寅正月

ここで米の値段を見てみよう。忠敬が測量を行った時代は、比較的物価の安定していた時代であった。少くとも米価では享和元年（一八〇一）から文政五年（一八二二）頃までは余り高下していない。この文書では、ほぼ百文で一升五合位の価になる。このころ江戸では一升百文位の時代が長く続いていた。江戸と地方では値段の差もあるが、何しろ江戸は將軍のお膝元なので、庶民も白米をたべていたから、脚氣になる人も多かった。それが慶応になると、百文で一合五勺しか買えなくなる。石高で生活していた武士の困窮を始め世の中騒然としてくる。このことから伊能隊が測量した十七年間は、まず平穩な時代だったといえる。

この文書については会員の菅哲彦氏のお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

参考文献 *岩城村誌

史料編

*廣島県の歴史

山川出版社

*日本歴史地名大系 39 愛媛県 35 廣島県 34 岡山県 平凡社

*日本史総覧（近世） 新人物往来社

地域史料

伊能忠敬の江戸在住日記(九)

佐久間 達夫

原本 忠敬先生日記 五十一

文化一二乙亥年(一八一五)

二月四日 晴天 今晩七ツ時妙薫佐原へ下る

午後浅草法事に行く 只高朗院殿

(高橋至時の謔 十三回忌取越)

同日 晴天 大工治兵衛絵図盤直しに来る

同日 晴天 夕方上総小堤村五右衛門庄作

母連れ来る 為小遺金貳百足遣す

夜一宿為致 夜雪降る

同日 晴天より雪降り二三寸積る 猶小雨

高橋家へ寒気見舞男鴨一羽牡蛎五合

遣す

同日 晴天 桑原 林家 撰津守殿 松平石

見守殿 洪江新之助へ 大工次兵衛

休み(次兵衛は治兵衛と同じ)

同日 晴天 洪川家へ行く 大工次兵衛来る

同日 晴天 大工次兵衛来る

同日 晴天 大工次兵衛来る

同日 晴天 大工次兵衛来る

同日 晴天 大工次兵衛来る

同日 晴天 大工次兵衛来る

同日 晴天 大工次兵衛来る 須藤甚右衛門

同日 晴天 渡辺丈之助入来 永沢太兵衛来

る 大工次兵衛休み

同日 晴天 島原 奥村嘉兵衛より書状届く

同日 晴天 奥村喜三郎寒中見舞届来る 今

日迄青木勝次郎相勤む

同日 晴天 御用仕舞 大工次兵衛来る

同日 晴天 浅草へ歳暮に行く

同日 晴天 雪少々降る 大工次兵衛今日限

り仕舞

文化十三丙子年

一月 元旦 曇 高橋様入来

同日 晴天 浅草御役所秋山 近藤 大田近

隣年始勤む 川口勝次郎 下河辺

政五郎来る

同日 晴天 桑原 林家 堀田様 御頭 御

組頭 川口勝次郎へ年始相勤 洪

川様入来

同日 晴天 洪川助左衛門様 渡辺丈之助へ

年始に行く

同日 晴天 浅草御用初めに行く

同日 晴天 地図御用始め

同日 曇 伊豆国御用先より書状来る 豆

州熱海に越年の由

同日 晴天 我等不快引籠る

同日 曇 夕方青木勝次郎年始に来る 夜

九ツ時日本橋通二丁目家出火

暁日本橋木綿店出火

同日 曇晴 今晩出火に付三人御手附未明

見舞 例年林大学頭へ年頭祝義に

鴨一雙進上 夜大雨

同日 曇天 夕方青木勝次郎来る 今日より

我等全快出勤す 夜微雪雨交り降る

同日 微雨 青木勝次郎今日より御用勤む

同日 曇 渡辺清蔵年始に来る 大村藩中

橋口郁三郎

同日 曇小雨 三次郎津田様年頭札に遣候

処 清蔵留主に其俣帰る 佐原

組頭三郎兵衛来る

同日 微雨微雪 三次郎津田様年頭祝儀に

遣す

同日 朝曇四ツ時晴 午前大村橋口郁三郎

入塾 我等又不快に付休む 江口小

兵衛より書状来る

同日 曇小雨 岐阜町二宮弥右衛門入門

金式朱送る

同日 曇 青木午後休み

同日 晴天 細川家中……(名を入れる

はずだった 来る

二月 朔日 曇夜晴 桑原先生七回忌 慢(ママ

饅頭の誤りか)頭貳百遣す 福知山江

口小兵衛へ書状遣す 芦田順吾を

頼む 我等快気今日より出勤

同日 晴天 広羽八十郎来る 大工治兵衛今

日より来る

同日 晴天 渡辺啓次郎測量御用出役被仰付

| | | | | | | | |
|-------|--|-------|---|--|-------|-----|--|
| 候事 | 渡辺丈之助来る 啓次郎召連 れ高橋作左衛門殿へ引渡す | 同 一八日 | 晴 | 青木勝次郎午後より休み | 同 七日 | 晴 | 我等浅草高橋様御役所へ行く |
| 同 五日 | 曇 午後広羽八十郎来る 珠盤注文 金三分持参 | 同 一九日 | 晴 | 奥村喜三郎来る | 同 九日 | 晴 | 今日佐原長沢方十郎帰る 庄司 |
| 同 六日 | 曇時々微雨雪交る 朝の内計はか り | 同 二二日 | 晴 | 今夜佐原又兵衛帰宅乗船 大野 弥三郎来る | 同 一〇日 | 晴 | 夜佐原伊能正作登る |
| 同 七日 | 晴曇 渡辺丈之助来る | 同 二二日 | 晴 | 会田算左衛門来る 東金内田弥 次馬来る 片貝村新吾舟来る 寺沢 善藏来る | 同 一二日 | 晴 | 下総国津宮久保木俊藏来る |
| 同 八日 | 晴曇 大工次兵衛休み 夜四時ころ より妙薫 哲之助来る 又兵衛 順 藏小娘来る | 同 二三日 | 晴 | 木斎きたる | 同 一四日 | 雨 | 下女お算今日より来る 東金内 田弥次馬来る おかつ連れ帰宿 |
| 同 九日 | 曇微雨午後より雨止む 我等高橋作 左衛門様御役所へ行く 大工治兵 衛来る 潮来妙真来る | 同 二五日 | 晴 | 曇夜大雨 妙薫 三治郎 哲之助 高橋様へ行く | 同 一六日 | 晴 | 大野弥三郎来る |
| 同 一〇日 | 晴 大工治兵衛来る 京師小谷平兵 衛へ算盤注文状遣す 金老阿三二分一 朱渡す | 同 二七日 | 晴 | 沢井峯越女門弟稽古初に付 我 等と妙薫 哲之助行く 今日青木勝 次郎帰宅 佐原長沢惣兵衛参る | 同 一七日 | 曇 | 従測量御用先書状到来 |
| 同 十一日 | 曇 京師小谷平兵衛へ昨日申越渡し 有之一封出す | 同 二八日 | 晴 | 夜上総国小河原弥左衛門来る | 同 一八日 | 雨 | 青木勝次郎今日より出勤 |
| 同 十二日 | 晴 奥村喜三郎来る 須藤甚石衛門 来る | 同 二九日 | 晴 | 吉川監物家来湯谷八十八書状持 参 | 同 二〇日 | 雨 | 測量御用に罷出居し面々今日青 山迄到着の旨新藏へ為知来候故 今 泉又兵衛罷越順藏召連 尤垂揺球 夜狂ひ候に付直しに来る |
| 同 十三日 | 晴朝之内曇 広羽八十郎帰国に付暇 乞いに来る 召仕喜兵衛出奔 時 計師大野弥三郎来る | 三月 朔日 | 曇 | 洪川助左衛門様御書曆算全書一 冊御持参 | 同 二二日 | 曇後雨 | 夜伊能正作下る 忠吉同道 の事 今日より大須賀伊八来る 但召仕の者也 |
| 同 十四日 | 晴 備後国箱田サエ(サエは在のなま りか)遠(遠は圖の当て字か)右衛門よ り書状来る(園右衛門は内弟子箱田良 助の父) | 同 二日 | 晴 | 東金矢島来る 娘お勝連れ来る 夜帰る 娘は是より逗留之事 肴一 折送る | 同 二三日 | 晴 | 東金内田弥次馬来る |
| 同 十五日 | 晴 我等深川八幡宮参詣 並弘参之事 | 同 三日 | 晴 | 岡田作次郎節供祝差登来る 右 為返礼三治郎遣す 藤田熊太郎へ も遣す 小藤田五郎へも同人遣す | 同 二五日 | 晴 | 粟生飯高宗兵衛来る 我等深川 八幡宮参詣 青木勝次郎御用仕廻 より休に駒込へ帰宅 |
| 同 一七日 | 曇夜晴 東金矢島来る | 同 四日 | 雨 | 上総国東金内田弥次馬来る 肴 一折送る | 同 二七日 | 晴 | 我等高橋作左衛門様御役所へ 行く 佐原長沢方十郎来る |
| | | 同 六日 | 晴 | 大村藩中尾節五郎来る 鯉節 一連送る 細川越中守藩中来る | 同 二八日 | 雨 | 雨午後より止む 高橋作左衛門様並 奥方 御子供衆三人御出 |
| | | | | | 四月 二日 | 曇 | 津宮村久保木俊藏帰宅 京師 小島九右衛門来る(以下略) |
| | | | | | 同 三日 | 晴 | 夜に入青木勝次郎来る |

同 四日 晴 東金内田弥次馬老父その外段々来る お勝も今日より逗留に来る

青木勝次郎今日より御用つとむ

同 八日 晴 京師小島九右衛門並門弟老人来る

京師人見唯右衛門へ方位頼遣す

同 九日 晴 豊 総州津宮村久保木俊蔵来る

広羽八十郎来る

同 一〇日 晴 豊午後小雨 下総佐原伊能正作登る

今朝より青木勝次郎帰宅 佐原長沢半右衛門来る

同 一一日 曇 久保木俊蔵帰国 伊豆測量御用罷出候面々今日内着の段為知来居候

処 明日に相成候段 昨夜今泉又兵衛為知に来る

〇〇十二日千住留りにて十三日着之事 青木勝二郎夜に入帰宅

同 一二日 晴 今日測量方内着に付て為迎渡辺啓一郎 青木勝次郎 橋口郁三郎

千住宿迄罷越 八ツ時頃一同着宿の事 夜石沢又兵衛来る

同 一三日 晴 永井甚左衛門 門谷清次郎着府に付来る 伊豆国七島地図段々持参

下役内弟子が千住まで出迎え 翌日、永井、門谷が挨拶にくる。伊豆七島図持参とあるから、作図は出張中に行われた。逗留の長かった熱海温泉で作業したと思われる。特に縮尺の大きい伊豆七島の特別大図が伊能忠敬記念館に伝えられている。

同 一四日 晴 我等風邪にて引込候事 坂部八百次来る 永井甚左衛門より為土産八丈綾老反貰う

坂部八百次は、五島で病没した副隊長・坂部貞兵衛の子。天文方下役を継いだ。下田で下僕を掃したと測量日記に出てくるが本人は測量に従ったことがわかる。

同 一六日 晴 今朝佐原正作下る 伊豆測量御用掉取に罷出候 多田用吉同道にて下る

同 一七日 晴 午後より青木勝次郎休み 佐原津宮村久保木太郎右衛門来る 門谷清二郎来る 為土産八丈綾持参

同 一八日 曇 朝雨 下総津宮久保木太郎右衛門来る 石沢又兵衛来る

同 一九日 曇 微雨 永井甚左衛門来る 坂部八百次 為土産八丈綾老反送る

同 二〇日 晴 今日より地図御用始 永井坂部 門谷来る

同 二一日 曇 青木午後より帰宿

同 二二日 晴 板倉甲斐守殿内伊東三郎兵衛来る 奥村喜二郎来る

同 二四日 曇 微雨 佐原金田平左衛門来る 久保木太郎右衛門来る

同 二五日 雨 佐原又兵衛登る

同 二六日 晴 粟生飯高宗兵衛来る 津宮村久保木太郎右衛門来る 小川次郎兵衛来る

同 二八日 朝晴四ツ頃より曇天午後雷鳴暴雨八ツ時より晴 久保木太郎右衛門来る 堀田撰津守様家来山田幸二郎来る 関東絵図五枚借(ママ)し遣す

同 二九日 晴 夜青木勝次郎来る

同 晦日 晴 桑原隆朝内室来る 青木今日から御用方勤む

五月 二日 晴 高橋家へ行く 大野弥三郎来る

同 三日 晴 七ツ時過より新吉原出火

同 五日 晴 為当賀桑原隆朝子供衆三人来る 藤田熊太郎へ三次郎遣す 為当日祝儀 岡田作次郎 中宿太五郎来る 右返礼三次郎遣す

同 六日 晴 暮頃本町三丁目出火

同 一日 晴 曇夜大雨 久保木太郎右衛門来る

同 二三日 晴 曇 今日より入梅に来(ママ)る

同 一五日 晴 青木勝次郎午後より帰宅

同 二四日 晴 津軽藩中松野茂右衛門来る

同 二五日 晴 曇 石沢又兵衛来る

同 二六日 曇 我等病氣引入

同 二七日 晴 午後暴雨 夜に入青木来る

同 二八日 曇 午後暴雨 青木勝次郎今日より御用勤む

六月 二日 晴 浜江新之助殿用人小黒二郎兵衛世話浪人儀(カ)兵衛来る 青木午後より休む

同 三日 晴 曇 深川黒江町名主助之丞書持持

参 参州路測量の節 附近に出候郷

士当時牢人韻学者井上孫六郎寓岩信

好来る 当時深川熊江(マコ)町名

主同居

同 五日 晴曇七ツ時過より雷鳴集雨 松平主

殿頭藩中萩定平来る

同 六日 晴 佐原村長沢太兵衛来る

同 一日 曇 五時前高橋家へ行く

同 一五日 曇朝の内雨 山王祭祀に付総休み為

祭礼見物 三治郎本石町伊左蔵へ

遣す

同 一六日 曇 三宅八郎右衛門来る 午前は晴

夜地震

同 一七日 晴曇 小西権二郎跡引移の由にて谷

口月窓来る

谷口月窓は画家で月僊の門人。そのころお玉ヶ池辺に
は数多くの有名人が住んでいた。月窓もその一人。

同 一九日 曇微雨 佐原小川立斎来る

同 二二日 曇 本所津輕御屋敷松野茂右衛門方

へ行く

同 二五日 晴 酉二刻土用入

同 二六日 曇晴 為暑中見舞 浅草天文方三家

足立 馬場 太田才助 山田幸次

郎 近藤重蔵 秋山内記へ行く

同 二七日 曇 為暑中見舞 渋谷新之助殿 松

平石見守殿 津田壮之助殿 堀田

摂津守殿 林大学頭殿 桑原隆朝

大槻玄沢へ相勤 高田進二郎来る

馬場左マコ十郎来る

同 二八日 晴 渋谷川助左衛門殿 市野金助暑中

見舞勤む 石沢又兵衛来る

同 二九日 晴曇 昨夜木挽町四丁目出火に付今

朝大槻玄沢へ為見舞 保木敬蔵遣

す 同人宅も類焼之由

同 晦日 晴 渋谷川様暑中為御尋 御出田中

金六来る 為暑中見舞 石沢又兵

衛 藤田熊太郎 岡田幸二郎 小

藤田五郎 石渡鐘太郎 清水伝左

衛門 紙屋新兵衛へ三治郎遣す

紙屋新兵衛は、江戸の伊能家の出入り商人、紙や筆な
どの地図作製用の品を納入していた。

七月 二日 晴 永沢半右衛門来る

永沢半右衛門俊世、永沢治郎右衛門景寿の子・俊将が

分家して半右衛門家をおこす。俊将の子・俊清の妻は、

忠敬の父の生家の神保利右衛門家人代幸宗の長女である。

俊清の子を俊世という。

同 三日 晴夜曇 為暑中見舞紙や新兵衛来る

同 四日 晴 為暇乞且暑中見舞 妙薫浅草へ行く

同 七日 晴 妙薫津田様御屋敷へ行く

同 七日 晴曇 今朝妙薫 哲之助佐原へ下る

為当賀藤田熊太郎来る 岡田作(マ

マ二郎、古(小)藤田五郎来る 右

三家へ為返礼三治郎遣す

同 九日 晴 上総東金内田弥二馬娘お勝諸道

具取りに太助来る

同 一一日 晴 御用済青木勝次郎帰宅

同 一三日 晴 黒田藤吉来る 今日より御用休

み 永井甚左衛門来る

同 一四日 晴 深川法清(ママ) 法乗院の当て字

か 院へ参詣 仙台屋敷敷へ桑原隆

朝方へ行く

同 一六日 晴 奥村喜三郎来る

同 一九日 晴 勢州四日市山中忠左衛門へ書状

出す

同 二二日 晴 高橋様御出 大槻玄沢老来る

今日江戸測量被 仰付候事

同 二二日 晴 津輕藩中松野茂右衛門来る

同 二三日 晴 藤田熊太郎母帰宅に付三治郎遣

す

同 二六日 晴 土浦藩中等原伝之助 同家中

旧名上田文助 当時小勝文助出奔

に付尋に来る

同 二七日 晴 佐原村伊能平右衛門来る 今朝

紙や新兵衛同居致居候同人娘致死

去候に付 為使三治郎遣す保木同

道

同 二九日 雨 渡辺清蔵来る

八月 朔日

曇 当賀休日 岡田 石沢 清水

小藤田 藤田来る 右五家へ為返

祝三治郎遣す

同 四日 曇 会田算左衛門来る 大野弥三郎
 へ方位三丁小象限儀一丁為直遣す
 同 六日 晴 福岡藩中広羽八十郎へ書状為持
 遣す 青木勝次郎へ並便にて書状
 出す
 同 八日 晴 進物取次上番猪平伴伝四郎天
 文方高橋作左衛門当分測量御用下
 役被仰付為吹聴来る
 同 九日 晴 七ツ時ころより桑原隆朝方へ行
 く
 同 一〇日 晴 青木勝次郎今日より御用つとむ
 同 十一日 曇少々雨 朝六ツ半頃高橋家へ行く
 今日至つて涼し 人々袷を着る
 同 一二日 曇晴 村田忠次郎来る
 同 一六日 晴 為虫干桑原隆朝内室来る
 同 一八日 曇 江島や清右衛門 平野太兵衛刀
 相返す 大野弥三郎方位三挺小
 象限儀一丁持参
 同 一九日 晴 六ツ半頃妙薫登る 忠吉算女連
 れ来る 召仕左兵衛佐原より登る
 同 二〇日 晴 渡辺丈之助長崎在勤被 仰付候
 付為暇乞来る 羊羹持参
 同 二四日 晴 今朝妙薫津田侯御屋敷へ行く
 佐原小川立斎来る
 同 二五日 晴 松平主殿頭藩中萩完平来る 我
 等へ在(マ)産の麹漬梅 渡辺啓
 二郎へ酒肴贈也 国図の事を談す
 同 二六日 曇 青木勝次郎今日休む 小川立斎
 岑蔵を連れ帰郷 今日煤はらいを

なす

同 二七日 晴 青木御用済より帰宿
 同 晦日 晴夜雨 大槻玄沢老来る

閏八月二日 晴曇 上総国東金内田弥司馬来る

同 七日 晴 明日より御府内側量相始候事
 同 八日 晴 今日御府内測量始に付 我等長

裾丸羽織家来二人 測量方下河辺
 今泉 永井 門谷 渡辺 股引半
 天刀持僕等人も 巨細は測量追順
 別記有之故略之今日より十四日迄
 各当此方より仕出にても何れも談
 合の上自分并持参

江戸日記 第五

文化十三年閏八月八日より文化十三年十月三日まで
 の記録である。江戸府内の細部を測つた江戸府内第二
 次測量期間中を含む病没前年の記録。江戸府内第二次測量
 では、忠敬は時々孫の忠誨(三治郎)をつれて参観した
 が作業指揮はおこなわなかった。

○江戸府内測量の概要

第一次

・測量期間 文化十二年二月三日、

二月九日(七日間)

・測量隊員 伊能勘解由 (七〇才)
 下河辺与方 (政五郎)
 永井充房 (要助)

・測量地

二月三日 東海道芝車町大木戸、芝口一丁目

室町一丁目

五日 大山街道渋谷大木戸、表伝馬町、

芝口一丁目

六日 半蔵門外、四谷御門外、田町一丁

目木戸

七日 市ヶ谷御門、筋違御門外、浅嘉町

八日 岩槻道王子村、浅嘉町、中山道板

橋宿

九日 室町一丁目、坂本町、奥州街道千

住小塚原

一〇日 日本橋本町二丁目、浅草御門、千

住中村町

一一日 日本橋通町、永代橋、黒江町

一二日 永代橋、立川一ノ橋、亀戸村

一三日 立川一ノ橋、両国橋、掃部場

一五日 東海道芝車町、金杉川尻、宇田川

町浦

一六日 宇田川町浦、船松町、佃島

一七日 佃島、船松町、永代橋広小路

一九日 相川町、蛤町、洲崎弁天社

・交會法による方位測定的主要目標物

上野東叡山中堂 築地本願寺(西門跡)

浅草東本願寺(東門跡)

江戸城半蔵御門 同市ヶ谷御門

同 小石川御門など

*測量内容は「伊能忠敬先生日記五二」に記されている。

第二次

・測量期間 文化一三年閏八月八日

一〇月三日(七四日間)

・測量隊員 伊能勘解由 (七一才)

下河辺与方 (政五郎)

永井充房 (要助)

門谷清次郎 (常久)

尾形慶助 (渡辺慎)

・測量地 第一次測量の残りの府内

*測量内容は「伊能忠敬先生日記五一」に、期日と若干の測量地が記されている。

文化十三年(一八六)

量始候 依之此段御届申上候 以上

月日 伊能勘解由 判

右書付式通差出す

同 一四日 微雨 測量出役の面々 我等方へ

相集い候上 天氣相同測量致す

我等出勤不致

同 一五日 雨 測量無之

同 一六日 雨 測量無之

同 一七日 曇 我等測量出勤不致

同 一八日 晴 青木御用済より休み

同 一九日 晴曇 夜佐原豊島屋登る

同 二〇日 晴 青木今朝来り御用勤む 渋川

同 二三日 晴 水戸宰相殿逝去に付 御府内
測量十七日の間休み 豊島屋佐原へ帰る

この水戸宰相殿は徳川治紀(武公)で文化十三年八月

閏八月一〇日 曇天微雨 測量無之

同 一一日 晴 夜青木勝次郎来る

同 一二日 曇 今日より青木御用勤む

同 一三日 曇時々微雨 我等出勤不致 測量

午後より無之 村田忠四郎来る

御府内測量届書同人へ相頼む 御

支配松平石見守殿御組頭渋江新之

助殿へ左の通差出す

私儀 去る七月二十一日御府内測量可仕旨、

天文方高橋作左衛門申渡候に付、去る八日より測

酒井若狹守殿御渡被成候御書付写

大目付へ

一、水戸宰相殿逝去に付為伺御機嫌 明二十四日総出仕の事 但し御家門の外は西丸へ不及出仕候

一、病氣幼少隠居の面々は 月番老中宅へ使者可被差越事

一、東国在邑の面々は 飛札可被差越事
一、普請は今日より三日停止 鳴ものは七日停止の事

子閏八月二十三日

右の廻状二十六日朝 為持差返候処
新之助殿内根岸庄司方より右請書の趣書付を遣す

同 二七日 晴 青木勝次郎午後より勤む 渋川
逸斎御出 近藤重蔵様御出

九月 朔日 晴 今日より御府内測量有之我等出勤不致

同 二日 晴 午後より青木勝次郎帰宿夜八ツ

半時過より 鞘町河岸出火 下河

辺 渡辺 門谷為見舞来る

同 四日 雨 今日測量無之 松平周防守様藩

中村上新左衛門参て入門する迄逗

(とど)まる

同 五日 曇天微雨 民部卿殿逝去に付九月四

日より十七日の間御府内測量無之
左の御廻状申の下刻石渡鐘太郎方

より到来 早速芝森本町薄井謙三
郎方へ順達之 尤洪江新之助殿副
廻状略之

青山下野守殿被成御渡候御書付享

大目付へ

民部卿殿逝去に付 公方様右大將様今日より
定式半減の御忌服被為 請候事

九月四日

前条同断別紙御書付享

一、普請は今日より三日鳴物は七日停止の事
右の通可被相触候

九月四日

右廻状為持薄井謙三郎宅為尋 小澤
権右衛門方迄遣候処 同人方にて
先方へ為御持候様に可取斗間請取
之書付被相越

同 六日 曇 佐原伊能七左衛門 桶や五兵衛
登る

同 八日 曇 青木勝次郎今朝来り御用勤む
同 九日 曇時々微雨 御停止中故当賀の取合

同 無之 浜田藩中村上新左衛門来る
同 一日 終日雨 今日より測量可有之処雨天
に付無之

同 二日 曇微雨 測量無之
同 三日 雨夜曇 測量無之

同 一六日 晴 吉川監物家来湯谷八十八代湯谷

限(カ)藏来る

同 一九日 晴曇 夜 佐原 関場幸七来る
同 二〇日 晴曇 御用済より青木勝次郎帰宿
此夜 佐原伊能七左衛門 桶や五兵衛
帰郷乗船の事

同 二二日 微雨 浜田藩中村上新左衛門来る
同 二四日 雨 今日 量地無之 何も此方へ出勤
村上新左衛門来る 佐原関場音右衛
門幸四郎今日より来る

同 二九日 曇 村上新左衛門来る

一〇月朔日 晴 夜青木勝次郎来る
同 二日 薄曇 今日より青木御用勤む
同 三日 雨 今日測量無之
同 五日 雨 今日測量無之

同 七日 晴 村上新左衛門来る 妙薫津田様
御屋敷へ行く
同 八日 晴 今日浅草御役所筋量地我等出勤
午後青木勝次郎駒込へ行く

同 九日 晴 量地我等出勤 今朝青木来り御
用勤む
同 一〇日 晴 今日量地我等出勤 村上新左衛
門来る

同 十一日 曇 我等量地出勤三治郎を連れる
午後青木趣町へ行き 夜に入り帰る
同 一二日 微雨曇天 今日測量有之候へ共我等
出勤不致

同 一三日 晴 我等量地出勤 三治郎召連れる
同 一四日 晴曇 我等量地出役 三治郎を連れ

行く

同 一五日 晴 洪川様御出 佐原豊島屋登る
今日より我等量地出勤不致

同 一六日 晴 明曉月食に付 右手配何角致す
渡辺啓二郎測量済より此方へ来宿
川口勝次郎逗留

同 一七日 晴 今曉月食七時頃より初虧、食分
保体月、右測量の事、委曲別記 渡
辺啓二郎食測後直ちに量地出勤

旧姓尾形は、養子に入り渡辺啓二郎となつて天文方下
役を拝命。江戸府内測量に従事しながら、月食を観測。
徹夜明けから測量現場に戻っている。阪部貞兵衛なきあ
と、忠敬は技術面で最も信頼したという。

同 一八日 晴曇 洪川様御出
同 一九日 晴曇 津宮久保木俊蔵来る

同 二〇日 朝微雪曇 今日本測初 船測可有之
処風波に付無之

同 二二日 晴 今日中川筋測量我等出勤尤船測
の事 但船数五艘当所より用意
外に屋根舟老艘 夜佐原音右衛門
幸四郎帰村 (つづく)

*大作の「伊能忠敬の江戸在住日記」も大詰めを迎
えました。次号は最終回になります。その後、
佐久間さんは「伊能忠敬日記」の執筆にあたっ
ておられます。江戸日記同様、新しい史料にご
期待下さい。

『新伊能忠敬物語 余話』

伊能測量隊の旅と旗本巡検使の通行

渡辺 一郎

はじめに 伊能隊を迎えた地元の文書をみていると、御巡見なみにとか、御分見に準じて、という言葉によく出くわす。徳川時代に幕府役人が遠隔地で仕事をするための出張ではなく、沿道の視察あるいは調査の目的を持って、長期にわたって諸国を巡回した例は、將軍の代替わりなどに旗本が派遣された巡見使と、伊能測量隊くらいのものであろう。

巡見使は將軍の特命により諸大名の治政を調査し報告するのが任務で、將軍の印を押した命令書を持参した。伊能隊は沿海と主要街道筋の実測が目的で、後半の幕府事業化以降でも旅行命令は老中が押印した御証文よって与えられた。したがって両者の軽重は、受け入れ側の藩にとって是非常にちがうのであるが、実務を担当する村側からみると、どちらもそう違わなかった。また、少し意味合いはことなるが朝鮮通信使も多数の幕府役人が付き添って諸国を通行するという点ではかなり共通している。

江戸時代の村々を長期間にわたって公務で通行し、同一人の視線で観察した例は、旗本巡見使、伊能測量隊、朝鮮通信使しかないというのは伊能忠敬研究会役員の安藤由紀子さんの説であるが、旅行規模と同一人物による観察という点で伊能隊の巡回はすば抜けている。忠敬は測量日記に日々の記録を淡々と記しているが、彼にもう少し余命を与えて各地の実態を描写する旅行記を書かせたらおもしろかったとお

もう。

民間人では、松尾芭蕉、菅江真澄などが有名であるが、忠敬は海岸線のすべてと主要街道を残らず観察したのであるから、視察の広さには格段の差があった。忠敬の文筆力は文系の人達にはかなわなかったかもしれないが、名主、事業家、測量隊長としての経営感覚はそれを補って余りあつたろう。残念である。

さて、主題の旗本巡見使の通行を、出雲の飯石郡誌の記述などによつて、伊能隊の旅と較べながら眺めてみたい。

巡見の歴史は古く、むかしは天子が巡狩する代わりに諸国に五年あるいは七年ごとに巡検使が派出されたという。また、私領、他領を問わず子の年、午の年に巡検使を出して民家の安否・国家の盛衰を調べたともいわれ、かつては、五年あるいは七年ごとに派出するのが定例であつた。

徳川幕府になつて寛永以降は、將軍代替わりのとき、一代に一度巡検使を出すこととなる。天寛日記によると、元和四年、牧野清兵衛が目付となり渡辺図書、永井監物が国々を巡察したとある。しかし、そのとき渡された命令内容の記録はない。

寛永、寛文期になつてから出された巡検使への示達は残っており、寛永一〇年、出雲地方を巡検した市橋伊豆守、柘植平右衛門、村越七郎右衛門に与えられた通達はつぎのとおりである。（原文は読みにくいので現代文とした）

一、このたび巡国にあたり御威光をかさにきて著つてはならない。召連れる下々まで固く申し付けること。

一、召連れた下々が喧嘩口論した場合は双方を罰すること。荷担した者も当事者と同じに処分する。

一、出張先の者と悶着を起こした場合は、その地の領主、代官などと相談し、是非を判断して適切な処置をおこなうこと。

一、竹木を一切伐採しないこと。押し買い、狼藉をしてはならない。

一、駄賃、宿賃は御定めのとおり必ず払うこと。代金を払わずに人馬をつかつてはならない。

一、国々諸所において何によらず馳走を一切受けてはならない。

寛永十年正月六日

御墨印

とある。何のことはない。身を慎めという將軍名による注意書きである。こういう命令を將軍が出さねばならないほど、節度が守られなかったということである。

巡検使の規律 寛文七年の通達では、

一、今回巡検を仰せつけられても、国絵図、城絵図の提出は求めないこと。

一、人馬、家数の調査はしない。

一、御朱印のほかの人馬は、お定め賃銭を受け取り滞りなく差出さなければならぬ。

一、どこを検分しても、使者、飛脚、音物は一切無用とする。案内の者がまかり出た場合は、断りを述べること。

一、掃除などは無用である。ただし、これまでの道路が通行できないような場合は除く。

一、泊々のための宿舎を修繕したり、新築したりしないこと。

一、巡国の面々は、泊々で必要な米や大豆はそのところの相場で買うようにすること。その他の品物もそのところの値段で買うようにしなければならない。

右の趣旨を国主、領主、御代官にまず触れるようにせよ。

寛文七年閏二月一八日

老中 六名 連署

岡野 孫九郎 殿

井戸新右衛門 殿

ということである。はじめの二項で、国絵図を要求するな、家数・人別を尋ねるな、と戒めているところが違っているが、その他の項目は、接待を受けるな、と戒めているばかりである。

これまでも命令は出ているのだが、実際にはさっぱり守られなかったことを証明するようなものである。

つぎに、巡検使が私領を巡検する場合の着眼点を列挙するとつぎのとおりである。

一、天領、私領とも町村政治の善悪

二、キリシタン宗門禁制の徹底の状況

もし、キリシタン、盗賊の訴えを受けたなら、領主の家来、代官に詮索をさせること。場合によっては自身で詮索する。

三、盗賊の仕置き状況

四、物価騰貴にともなう人民の苦境

五、幕府の施政に違反するものの有無

六、物貨を買い占める者の有無

七、金銀、米銭の相場の取り調べ

八、高札掲示の状況

九、浦々船数、水主数の取り調べ、および江戸あるいは大阪まで船賃、船役、運上役取り調べの件

十、浦々湊々において諸賭け事、遊女抱え置くなど致さざる旨、庄屋、五人組み、船宿等より誓紙を徴すること

十一、古城跡は見分を要しないが、通行路より遠くない名城の跡は見分すること

ほかに公領巡検のさいの調査事項もあるというのが省略する。また、禁止事項についても指示されている。

- 一、国絵図、城絵図を徴してはならない
- 二、人馬、家数改めはしない
- 三、公事訴訟、目安の受け付けはしない

巡検に絵図を出させないとは意外な感じであるが、国絵図、城絵図は手書きの巨大図で制作に多大な労力を要した。幕府にはすでに提出済みであり、改めて要求して手数をかけることを避けたのであろう。略図的なものはなければ作業上支障があったと思われるから別だろう。

伊能隊は幕府事業になつてからは、村絵図を提出させており、用意の無い村では態々測つて作成している。場合によっては縮尺も指定していた。国絵図の提出は命じていないが、伊能家に借用の記録が残っており持参して参考にしたことは確かである。場合によっては、藩から提供したところがあったかも知れない。

人馬、家数を改めないとは、どういう意味であろうか。伊能測量でも加賀藩および紀伊藩で人別、家数の提出を拒否されている。諸藩の

国力の根源である人馬、家数は機密事項なので調べなくともよいということであろうか。あるいは、人馬、家数を改めることになる、実数をあたるというような行き過ぎが起ころのを避けたのかも知れない。伊能測量に対応した村々の記録では「人別、家数は御巡検に答えたと同じように答える」という注意書きがよく出てくるから、実際には巡検使に家数人別は報告されたと考えられる。行き過ぎの防止がねらわれたのだろう。

沿道に迷惑がからないよう、寛文七年の老中連署の触書ではさらに細かく注意している。

- 一、宿々畳の表替えは無用である。古くてもかまわない。
- 二、宿舎に湯殿、雪隠がないときは、なるべく軽く設置する。
- 三、鹽、柄杓、鍋釜は古くてもかまわない。無い場合は軽く支度すること。
- 四、宿舎にできる家が一村に三軒ないところでは、寺でもよいし、村が違つてもかまわない。(巡検使は三人一組で出された)
- 五、その土地に無い品物を他から取り寄せさせて買うようなことをしてはならない。(二行の日常用品を供給するための商いをさすか)

また、正徳二年八月の巡検使出発のとき与えた注意ではつぎのように記されている。

- 一、巡検使の面々は、御朱印の員数以上に人馬が必要なときは、所定の駄賃がきまつている場合はそのとおりに、定まつていな

い場合は、近辺のお定めの割合で賃金を支払うこと。御朱印の員数以外に賃なしの人馬一人、一匹も出させてはならない。

二、巡検使のおる道筋で、百姓が農業をするのは遠慮しなくてよいと申し付けること。

三、泊まり、昼休みの場所で入用の飯米、塩、味噌、薪、酒肴、野菜等はその場所の相場で買うようにすること。

四、巡検の面々は金銀、米銭、衣類、道具は申すに及ばず、酒肴、菓子等まで（貰い物は）一切受けない筈なので、内々でも連絡をしないよう、知行所の者たちに申し付けること。もし、内々で通報したことが分かった場合は曲事になるということをしつゝ申しわたすこと。

五、どこを見分しても、私領からの音物は一切受けないので、音物は申すに及ばず、使者、飛脚を出すことも堅く無用である。

六、野道の馳走として新規に茶店など作することは一切無用である。

右は、今度、御料所国々へ巡検に差し遣わされるが、往來の道筋では私領の村々も通過する。書面の条々をあらかじめ、地頭から領知する村々に触れさせ、相違無いようにしなければならぬ。

ということであつた。これを読むと、伊能隊を迎えて村々が準備した受け入れ態勢は、ほとんどが巡検使に与えられた訓令に違反する。巡検使には、旅行の経費は与えられた旅費から自弁し、諸藩・村々の馳走にならないよう繰り返し戒めているが、伊能隊には文化二年に始めて幕府測量隊として出発の際に一応の訓令が出されているが、繰り返されてはいない。

巡検使の場合は色々な人が出るし、諸藩にとっては大切な客である

から、過剰な接待が行われ、訓令が空文化していたということである。

伊能隊についていえば、幕府測量隊になってからの村々の接遇では、宿舎の新築はみられないが、雪隠、風呂場の改良新設は見うけられ、障子、襖、畳みの手入れなどはよく行われている。

金銭の贈り物は厳しく辞退しているが、四国測量の後半以降では、進物は受けており、測量日記に使者・品物、場合によっては換金した金額まで書いている。それでも伊能隊の旅行については問題になってはいないから、許容される範囲だったのである。

巡検使については、それほど建前と実際が違っていたのかもしれない。ついでながら、第五次測量中に忠敬が病氣になり、隊規が乱れたときは、御徒目付の報告によつて若年寄・堀田摂津守から天文方經由で注意され、忠敬は帰府後慎重伺いを出している（高橋景保御用日記、忠敬江戸日記）。伊能隊の行動が御徒目付により監察されていたということは、巡検使も目付けの配下により監察されていたと考えられる。その上での注意であつた。

食事について忠敬は、一汁一菜、馳走がましいことはしないように、先触れでいつも断っている（各地に写が現存）が、一汁三菜くらいが普通で、新しい領内に入ったときとか、出境の前夜など二汁五菜ということもあつた。

先触れのとおり一汁一菜とした例も無くはないし、伊能隊側の要求でごく簡単な食事を出したこともあるが、忠敬が馳走を断つた例はほとんどない。ただ、お酒については、巡検使にはお茶と称して酒を土瓶に入れて出し、ひそやかに飲んだという記録がある（信州麻積宿本陣・白井家の記録「本陣」）が、伊能隊では、禁酒は厳格に守られた。夜の天文観測、測量データ整理といった日課が控えており、晩酌を

やっていたは作業が成り立たなかった。現代風にいえば残業を前提として計画が組まれていたのである。

時によっては、下郎が寝酒を所望したので、代金を貰ってあり合わせの肴を出したという記録が出て来たり、酒は出さないという情報だったので出さなかったが、隊員から求められたので仕方なく出した、というような記録にも出会うこともあるが、禁酒という記録のほうがあるかに多い。

隊員が揃って飲んだという話しは、長い藩領の測量を終わった際に地元が催したお別れ会くらいのものである。このときは、作業を休み、忠敬も杯を受けている（天草の上田家文書）。

巡検使一行の人数 旗本の巡検使が連れて歩いた随員は、時期により大きく異なるが、多いときは一人の旗本が百人を従えたという。幕府に経済的余裕がなかったときは少なく、十数人ということもあるが、飯石郡誌では、つぎのとおり記している。

| | | |
|---------|-------|-----|
| 一〇〇〇石より | 一五〇〇石 | 三〇人 |
| 一五〇〇石より | 一九〇〇石 | 三五人 |
| 二〇〇〇石より | 二四〇〇石 | 四〇人 |
| 二五〇〇石以上 | | 四五人 |

巡検使が三人である理由がよくわからないが、三人は相談することなく、それぞれが報告書を書いたという。いい報告をしようと競争意識も働いたかもしれない。また、今でも三人のチームを作るとどうしても一人と二人の組み合わせになってしまうとのことである。人間の心のヒダの習性まで考慮して決められていたとすれば、驚く他は無い。

任務の遂行にあたっては、三人のうち、病氣にかかる者が出て、残る者は予定どおり巡検を進めるものとし、たとえ、一人になっても予定どおり行動すると決められていた。随従者が病氣になったときは、その地の藩吏に委託して残してゆく。また、遁走者あれば追手を出す。欠員が多ければ要員を補充し、法度にそむくものがあれば処分を専決するとされた。

旗本一人とその家来により編成された独立任務部隊三隊が同時派遣され、それぞれ別の目で各地を監察するようなもので、諸藩にとつては、通達がどうあろうと、重大な関心を持たざるをえなかったろう。領主が御機嫌伺いに訪問すれば、上様は御機嫌よく御座ある旨を達する。また、国主、領主自身の供応も決して受けはいけないと厳達された。

このあたりは、伊能測量と基本的に違う点である。將軍名代であるから、とうぜん城中に迎えられ、領主自身が挨拶に伺候しなければならぬ。巡検使が上段の間に座り、將軍に代わってご機嫌伺いを受け、前記のような応対をしたのであろう。そのあとは座を変えて対等な立場で世間話などを交わした。

宿舎に挨拶に出るのは、伊能隊の場合は名主、庄屋、年寄、などであったが、巡検使の場合は家老またはそれに準ずる上級家臣であった。宿亭主は、伊能隊の場合は村はずれ、町入り口、船着き場まで出迎へ挨拶したが、巡検使には多くの場合お目見えさえも許されなかった。

宿舎の警備は、伊能隊の場合は村役人が脇差を帯して、村人足を指図したが、巡検使では藩士が足輕を指揮して実行した。道中の案内も村役人ではなく、上級藩士が付き添った。伊能隊でも藩士の付き添いはあったが、ほとんどが下級藩士または専門職であった。

というわけで、案内する藩側の体制は大いにちがうのだが、宿舎、夜具、食事などは殆ど同じで、諸事御巡検に準じて用意された。考えようによつては、眺めるだけの巡検より、現実に尺をあたる伊能隊のほう怖かったかも知れない。

巡検使の旅費 巡検使に与えられた旅費について宝暦十年八月の記録がある。先規のとおりとあるから従来も同様だったろう。

召し連れる人数一人一日 二百文

前渡し金の請求日数は

五機内、東海、関東 百日分

中国、北国、四国 百五十日分

九州、奥州筋 二百日分

とされ、帰府し日数が確定次第、勘定奉行の裏判を貰って精算することになっていた。というから、巡検の所要日数はだいたいこの程度だったのであろう。

家来を三〇人つれて百日旅行した場合、百二十両となる（一両は五貫文とした）。つつましく旅をすれば十分な額であるが、受けた待遇に見合つて支払っていたら全く足りなかったらう。

巡検使一行の編成 宝暦十一年に出雲に出張した巡検使一行の人数は左のとおりであった。

阿部内記

御 供

十一人

御徒・御足輕・御小人

三五人

杉原七郎

御 供

八人

御徒・御足輕・御小人 二二人
弓氣多源七郎

御 供 十六人

御手廻り 六人

御中間 六人

足輕 四人

右の巡検使は、具足箱、両掛、挟箱、御手挟箱、合羽、駕籠、乗換馬を所持し、なかには絹夜具まで持参した。御用人、御用達はもちろん、杉玄春、杉山玄伯という二人の医者も伴っていた。

藩庁側の準備としては案内のため、郡奉行、代官、地方役、郷組小頭、御先払い、夜回り足輕、下郡（役割は不詳）、奥頭（くみがしら）、庄屋、年寄などが出役した。また、万一の手落ちがないよう、ひそかに巡検を終えた地方を訪ねて調査し、一行を迎える準備を整えた。

調査では、一行の鳥毛槍の形状、紋所、六人法被、荷印、舟印、長持紋章、御朱印、供者の笠印などを調べて図解し関係者に予告した。

巡検使一行が対象の村に入ると、担当の庄屋は木綿の羽織に股引脚絆で案内をした。一行の問いに答えるための材料として、戸口、里程、石高、古城、名所、旧跡など細大漏らさず扇子の片面に書いておいて、これによつて答弁をした。この辺は伊能測量も全く同じである。伊能隊が徴した書き上げも巡検使への回答内容を書面にしただけであった。

接待 巡検使の接遇については、幕府からの厳しい指示にもかかわらず、宿泊、通行の一切の費用は村々の負担だったことは、巡検使費用の割符帳が残っていて明らかである。

宿舎の造作、畳替え、風呂桶盥（大小）の新調、一定の間数寸法の

湯殿、雪隠の新調、村内の道路橋梁の改修、立砂などもおこなわれた。伊能隊もこれに準じて用意がされた。

正使のことを殿様とよび、給仕人は子供に袴を着せて出した。おとなを出して万一不調法があったとき、言い訳ができないので子供を使ったという。客人は馴れない江戸言葉を話すので、襖の陰に後見の老人がいて諸事を指南したという。料理には巡検使の名前にかかわる物は一切使わず、精進日も予め調べて魚肉を出さないようにした。

途中経過地における献立の調査も行われた。出雲入国に先立つ宝暦一一年の播磨、但馬の献立記録が残っている。形は一汁一菜であるが、まずまずの馳走である。

播州の献立

夕食 平皿 鯛、しいたけ、かわ牛蒡、三つ葉、玉子

汁 うとめ、ちさ、いも

ご飯

朝食 平皿

汁

わさび、さわら、きりいも、くずあい

しいたけ、かんぴよう、ふき

ご飯

但馬の立て献立

夕食 平皿

うすくずしたけ、すり生がくしこ、たい

たけのこ、ふき、山芋

汁

細ゆば、こち、岩たけ

ご飯

夜食 茶碗

よせどうふ、くすあん、からし

ご飯

夜は宿主、肝煎が交代で寝ずの番をつとめ、宿舍の前後には村民二人が不寝番をした。町村内には喧嘩口論高声を禁じ、眼にふれないよ

うにして消防器具も用意した。

これだけ手をつくしても、宿主は正使にお目見えを許されないのが普通であった。態々普請などして巡検宿をつとめ、巡検使が喜んでお目見えを許し、杯を取らせる、というようなことがあると、例外なことでとされた。

巡検使の応対には各藩が非常に気を使った。派遣人数は時により増減があったが、定期的に派遣された巡検使制度は、幕府側にとつては、民情視察とともに、威令を津々浦々の村民の脳裏に焼きつかせる効果が大きかった。

参考資料 島根県飯石郡誌

臼井良作『本陣の記録』（昭和50年）

忠敬談話室だより

佐原の伊能忠敬記念館の看板が新しくなりました。書は会員の伊能静光さんによるものです。佐原市の広報紙で紹介されました。



伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。
二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

発表誌 年三回以上 交流誌 随時

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等

入会を希望される方は、郵便振替の送金者氏名欄に住所、氏名、電話番号、FAX番号などを明記し、通信欄には専門分野、趣味分野、入会の動機、本会に対する希望など御意見を書き添えて、入金四千円、年会費六千円、合計一万円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをすべてお送りします。

送金先 (室番が六一八に変更。乞御注意)

〒162-0822 東京都新宿区下宮比町二の二八の六一八

伊能忠敬研究会

郵便振替口座 〇〇一五〇一六〇七二八六一〇

投稿規定

会員は発表誌、交流誌に投稿することができます。一回の掲載は、原則として四頁く六頁です。越える場合は分載します。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任して下さい。

一頁は二段組31字×26行、三段組20字×30行です。タイトルは五行分とします。写真、図表は大きさを考慮して下さい。

伊能忠敬研究会のホームページ

伊能忠敬研究会のホームページは三つあります。一般情報は大友常任理事の担当です。それぞれがリンクしています。

<http://www2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

史料情報は、「資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、伊能忠敬関連史料リストなどが御覧いただけます。

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakano/> 14年10月変更

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。この忠敬の書齋にも是非お越し下さい。

<http://www.tl.rim.or.jp/~koko>

編集後記

○テレビ「伊能忠敬のニッポン・二百年前の地図が語るもの」では忠敬が残した大きな光を現代に投影することで、さまざまな変化を捉えていました。若い制作担当者たちは遠くの星座を測り、今の日本の位置を計測していたようで、そのまなざしが強く印象的でした。

○今年一月に宮崎の油津港で饅頭の生節が、七月の北海道では本場の昆布がありました。生でも美味しいものですが、時間をかけ熟成された別の一品にはより味わいのある味覚にしています。忠敬さんの偉業には「だし」味もすばらしく、いろいろな調理法がありますね。

○時にラジオから聞こえてきました。「智頭急行に新型車が走る」「加賀百万石展の入場者が百万人を超えた」「照山湖一周マラソンが行われる」など会員のどなたかのお近くでの話題です。会報を通じて心が全国に広がってきました。台風では、無事を祈っています。

○「天高し 白寿の筆の 忠敬碑」 伊能洋氏・小倉記念碑にて (F)

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.30 2002



TOPICS

| | | |
|---|------------------|----|
| Congratulations on the 100th anniversary of Narita Buddhism Library | Watanabe Ichiro | 1 |
| A small foot survey rally was held in Tokuyama | | 9 |
| City control point for public survey was set at Kitakyusyu Survey Memorial Monument | Ishikawa Seiichi | 23 |
| Process to the accomplishment of the City control point for public survey | Murai Sumitaka | 24 |
| Footmarks of Inoh's team on the route in Tanba and Tango area [The Asahi] | | 39 |

FROM VISITORS' RESISTERS

Inoh Yoko 25

MATERIALS

| | | |
|--|-------------------|----|
| Report of Small-scale Inoh Maps (of naval college) | Tanimura Seijiro | 3 |
| Family Documents 21 : Tadataka and Rinzo Mamiya (2) | Ando Yukiko | 10 |
| Nishimura Tachu, an astronomer in Kaga (3) | Kawasaki Michiyo | 14 |
| Tadataka was long-lived people ? | Ishikawa Seiichi | 20 |
| Branch point of Tara Street | Matsuo Noriyoshi | 26 |
| Tadataka Inoh's survey route in Tanba and Tango area | Kobayashi Kiyoshi | 33 |
| Tadataka Inoh and Hashizu village | Tanaka Yasuo | 40 |

REGIONAL MATERIAL

| | | |
|---------------------------|---------------|----|
| Documents of Iwaki Island | Ito Eiko | 44 |
| Diary of Inoh in Edo (9) | Sakuma Tatsuo | 51 |

ANECDOTES OF "NEW STORY OF TADATAKA INOH'S LIFE"

| | | |
|--|-----------------|----|
| Journey of Inoh's Survey Team and Passage of Circular Governmental Supervisor Team | Watanabe Ichiro | 58 |
|--|-----------------|----|

MEETING ROOM

| | | |
|--|--|----|
| New signboard of "Inoh Tadataka Memorial Museum" | | 64 |
|--|--|----|

Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY